

河内長野市遺跡調査会報Ⅲ

1992年3月

河内長野市遺跡調査会

序 文

豊かな文化財と自然環境に恵まれた河内長野市は他の大阪周辺都市と同様に、住宅都市に変ぼうしております、そのため、住宅開発、道路整備など都市基盤整備のための開発が進められています。

このような中で、先人が長い歳月にわたって残してくれた文化遺産を保護・保存し、後世に伝えてゆくことは、現代に生きる私たちの責務であります。

本市においては、開発に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。本書に発掘調査の成果を収録いたしました。

皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究の一助として活用していただければ幸です。

最後になりましたが、発掘調査並びに本書作成にあたり、ご理解とご協力いただいた関係各位に心から感謝の意を表します。

河内長野市遺跡調査会
理事長 中尾 謙二

例　　言

1. 本報告書は昭和63年度から平成2年度に河内長野市遺跡調査会が河内長野市から委託を受けた市内3遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、本市教育委員会社会教育課文化係尾谷雅彦が担当者として実施した。
3. 調査にかかる事務は調査会事務局長釜ヶ谷正己（昭和63年度）、植田兵武（平成元年度）、井内正忠（平成2年度）が主担した。
4. 本書の執筆は尾谷雅彦が行い、遺物については中村清美がこれを補助した。
5. 編集は尾谷が担当し中村清美が補助した。本書の文責は尾谷が負うものである。
6. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。
明地奈緒美・阿部園子・梶谷佳世・喜多順子・久保八重子・結城（阪本）桂子・今西（杉山）和良・高田加容子・中西和子・中野雅美・平井令子・松尾寿美子・村上貴美
7. 調査の実施に関しては下記の方々の協力を得た。
土井畠数男氏・コスモ石油株式会社・河内長野市企画調整部政策調整室・河内長野市消防本部
総務課・測量エンジニアリング株式会社・国際航業株式会社・大和興産株式会社・中央建設株式会社・株式会社島田組・高向公民館・各地区自治会
8. 本調査の記録はスライドフィルム等でも記録しており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡　　例

1. 本報告書に掲載されている標高はTPを基準としている。
2. 土色は新版標準土色帖による。
3. 平面測量基準は国家座標第VI系による5mメッシュを基に実施したものである。
4. 図中の北は座標北である。
5. 掲載の遺物の縮尺は土器1/4、石器1/2を基準に各遺物の状況により、縮尺は替えている。

目 次

序文

例言

凡例

I.はじめに.....	1
II.位置と環境.....	1
III.調査の結果.....	5
1.本多藩陣屋跡.....	5
2.高向遺跡 TKO89-1	19
3.ジョウノマエ遺跡 JNM89.....	24
4.ジョウノマエ遺跡 JNM90.....	29

挿図目次

第1図 河内長野市遺跡調査分布図.....	2
本多藩陣屋跡	
第2図 本多藩陣屋跡調査地位置図.....	5
第3図 調査区遺構配置図.....	6
第4図 調査区南側壁土層図.....	7
第5図 SK-1 遺構実測図.....	7
第6図 SK-1 出土遺物実測図.....	8
第7図 SD-1 出土遺物実測図.....	9
第8図 SD-2 出土遺物実測図（1）.....	10
第9図 SD-2 出土遺物実測図（2）.....	11
第10図 SD-2・SD-3 遺構実測図.....	11
第11図 SD-3 出土遺物実測図.....	11
第12図 SD-4・SD-5 遺構実測図.....	12
第13図 SD-4・SD-5 出土遺物実測図.....	12
第14図 SW-2 遺構実測図.....	13
第15図 SW-2 出土遺物実測図.....	13
第16図 下層包含層出土遺物実測図.....	15
第17図 下層包含層出土遺物実測図.....	17
高向遺跡 TKO89-1	
第18図 高向遺跡調査地位置図.....	19

第19図	調査区遺構実測図	20
第20図	S B - 1 遺構実測図	20
第21図	S B - 1 出土遺物実測図	21
第22図	S K - 1 出土遺物実測図	21
第23図	P - 1 出土遺物実測図	21
第24図	S B - 2 遺構実測図	22
第25図	S B - 2 出土遺物実測図	22
第26図	下層包含層出土遺物実測図	23

ジョウノマエ遺跡 JNM89, 90

第27図	ジョウノマエ遺跡調査地位置図	24
第28図	ジョウノマエ遺跡全体図	25~26
第29図	JNM89調査区土層図	27
第30図	S K - 2 遺構実測図	28
第31図	第1調査区出土遺物実測図	28
第32図	第2調査区出土遺物実測図	29
第33図	第3調査区出土遺物実測図	29
第34図	JNM90調査区土層図	31
第35図	JNM90出土遺物実測図	32

表 目 次

第1表	河内長野市遺跡地名表	3
-----	------------	---

図版目次

本多版陣屋跡

図版1	遺構 遺跡全景(東から)、SW-1・2(東から)	
図版2	遺構 SD-2(北から)、SK-1 土器出土状況	
図版3	遺物 SK-1(2・3・5~12)	
図版4	遺物 SK-1(1・4・13・19)、SD-1(20~22・24)	
図版5	遺物 SD-1(23・25・29)、SD-2(30~32・37・38・40・42)	
図版6	遺物 SD-2(33~36・39・41・43~48・53・54)	
図版7	遺物 SD-2(49・50・57)、SD-3(57)	
図版8	遺物 SD-4・5(60・62・54)、SW-2(65・68~72・74)	
図版9	遺物 下層包含層(76~80・82~85)、上層包含層(87~90)	

高向遺跡 TKO89-1

図版10 遺構 遺跡全景（北から）、SK-1 遺物出土状況

図版11 遺物 SB-1 (1・3~8)、SK-1 (9・11~19)、P-1 (20)、SB-2 (21~23)、下層包含層 (24・25)

ジョウノマエ遺跡 JNM89,90

図版12 遺構 JNM89遺跡全景（西から）、第1調査区全景（南から）

図版13 遺構 第2調査区（北から）、第3調査区全景（南西から）

図版14 遺構 JNM89 SK-2、JNM90遺跡全景（北から）

図版15 遺物 第1調査区（1~19）、第2調査区（20~23）、第3調査区（24）

図版16 遺物 JNM89 第3調査区（23~34）、JNM90（36~39）

I. はじめに

近年の地下の高騰は、比較的安価であった河内長野市の住宅開発に拍車をかける切っ掛けとなつた。大規模な住宅開発は無くなつたが、ミニ開発や集合住宅の建設が盛んとなった。

このような状況の中で、河内長野市は公共上下水道、アクセス道路、公園等の都市機能の整備文化会館などの文化施設の充実に努めている。

しかし、このような公共関係の整備も一般の開発と同じように埋蔵文化財を避けて通ることはできず、教育委員会と都市整備部局とは文化財保護と開発の調査に力を注いできた。

公共事業に関連する埋蔵文化財の取扱いについては、前年度からの計画段階での保存協議を進める。

II. 位置と環境

和泉山脈、金剛山地に源を発する石川の各支流や東除川は、狭小な河谷を形成しながら北流する。河内長野市はこれら河川によって作られた谷や河岸段丘上に集落が発達している。とくに中心となる長野や三日市は谷口の集落として、また、各谷筋を通る街道の要衝として発達してきたものである。

遺跡もまた、谷筋毎に分布している。縄文時代の遺跡は最近増加しているが、石川本流から天見川沿いに北から向野遺跡、鳥帽子形城、三日市遺跡の3遺跡があり、後期を中心とする土器が出土している。また、石川本流には高向遺跡や宮山遺跡があり、宮山遺跡からは中期後半の土器と共に堅穴住居も確認されている。さらに、三日市遺跡からは早期の土器も出土している。これらの遺跡以外に、高向遺跡、高木遺跡、寺ヶ池遺跡、菱子尻遺跡からはサヌカイト片や石器が出土している。

弥生時代は石川左岸の塩谷遺跡や天見川右岸の三日市遺跡から中期が、大師山遺跡からは後期の遺跡が出土している。

古墳時代は天見川を見下ろす位置に、前期の前方後円墳大師山古墳、中期の三日市遺跡の古墳群、後期の鳥帽子形古墳が分布している。石川本流の向野町から寿町にかけては五の木古墳、法師塚、双子塚などの古墳が分布していた。また、石川の左岸上原には塚穴古墳が現存している。集落遺跡では前期から中期にかけては天見川沿いに三日市遺跡があり、後期前半では同じく天見川沿いに鳥帽子形城や小塩遺跡、加塩遺跡がある。

奈良時代になると、高向遺跡や鳥帽子形城、加塩遺跡から掘立柱建物や土坑が検出されているまた、本市と大阪狭山市との市境の小山田町から2基の火葬墓が発見されている。



第1図 河内長野市遺跡調査分布図

第1表 <河内長野市遺跡地名表>

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	鳴尾遺跡	弥生時代・中世	46	加塙遺跡	古墳時代後期
2	塙谷遺跡	弥生時代・中世	47	尾崎北遺跡	古墳時代後期
3	小山田1号古墓	奈良時代	48	尾崎遺跡	古墳時代～中世
4	小山田2号古墓	奈良時代	49	加賀田神社遺跡	中世
5	妻子尻遺跡	編文時代～中世	50	ジョウノマエ遺跡	中世
6	千代田神社遺跡	中世	51	庚申堂	中世
7	市町東遺跡	弥生時代・中世	52	栗山遺跡	中世
8	寺ヶ池遺跡	旧石器時代～編文時代	53	寺元遺跡	奈良時代～平安時代
9	住吉元宮遺跡	中世	54	觀心寺	平安時代～
10	西之山町遺跡	中世	55	延命寺	
11	野作遺跡	中世	56	川上神社遺跡	中世
12	西代神社遺跡	中世	57	金剛寺	平安時代～
13	本多蘿陣屋跡	飛鳥・藤原時代・近世	58	日の谷城跡	中世
14	勝所蘿陣屋跡	近世	59	沙の山城跡	中世
15	向野遺跡	編文時代～中世	60	峰山城跡	中世
16	双子塚古墳伝承地	古墳時代	61	日野觀音寺遺跡	中世
17	五の木古墳跡	古墳時代後期	62	仁王山城	中世
18	法郎塚古墳伝承地	古墳時代	63	岩立城	中世
19	長野神社遺跡	中世	64	タコラ城	中世
20	青ケ原神社遺跡	中世	65	国見城跡	中世
21	長池廃跡群	平安時代～近世	66	稻荷山城跡	中世
22	伝「仲哀廟」		67	旗藏城跡	中世
23	上原近世瓦窯	江戸時代	68	大江家	中世
24	上原北遺跡		69	石仏城跡	中世
25	上原中遺跡	古墳時代・中世	70	左近城跡	中世
26	囁穴古墳・上原遺跡	古墳時代後期～中世	71	清水遺跡	中世
27	大日寺遺跡	中世	72	薬師寺	中世
28	河合寺城跡	中世	73	千早口駅南遺跡	中世
29	未広窯跡	中世	74	地藏寺	中世
30	河合寺	中世～	75	旗尾城跡	中世
31	福田家	近世	76	葛城第18番塚	中世
32	鳥帽子形古墳	古墳時代後期	77	天見駅北方遺跡	中世
33	鳥帽子形城跡	中世～近世	78	葛城第17番塚	中世
34	鳥帽子形八幡宮	中世	79	薬師堂跡	中世
35	喜多町遺跡	編文時代～中世	80	流谷八幡神社遺跡	中世
36	上田町遺跡	古墳時代	81	小野坂	中世
37	上田町窯跡	近世	82	蟹井瀬北遺跡	中世
38	大龍山遺跡	弥生時代後期～	83	蟹井瀬南遺跡	中世
39	大龍山古墳	古墳時代前期	84	蟹井瀬南遺跡	中世
40	高向遺跡・高向南遺跡	古墳時代後期	85	清水阿旁乾堂跡	中世
41	高向神社遺跡	編文時代～中世	86	椎現城跡	中世
42	高向神社	中世	87	流煙埋墓	中世
43	慈持寺跡	中世	88	堂村地蔵堂跡	中世
44	野間里遺跡	奈良時代～平安時代	89	天神社遺跡	中世
45	宮山遺跡	編文時代～平安時代	90	中村阿旁乾堂跡	中世
46	宮山古墳	古墳時代後期	91	西の村阿旁乾堂跡	中世
47	高木遺跡	編文時代	92	東の村觀音堂跡	中世
48	三日市遺跡	旧石器時代～近世	93	光鶴寺	中世～
49	小塙遺跡	編文時代～奈良時代	94	葛城第15番塚	近世
50			95	岩瀬寺	中世～

平安時代の遺跡はまだ、尾崎遺跡の10世紀の掘立柱建物や三日市遺跡の11～12世紀の掘立柱建物以外は確認されていない。しかし、觀心寺や金剛寺などの寺院はこの時期、広大な庄園を有していた。

中世になると、各谷筋（高野街道や天野街道沿い）に集落が分布している。とくに、高野街道に沿っては、西高野街道では北から菱子尻遺跡や古野町遺跡があり、東高野街道では向野遺跡がある。西、東が一つとなって天見川を南に伸びる高野街道では、合流付近の長野神社遺跡や鳥帽子形遺跡、更に南に三日市遺跡、石仏遺跡、尾崎遺跡、清水遺跡、千早口駅南遺跡、天見駅北方遺跡、蟹井瀬遺跡、蟹井瀬南遺跡と続く。これらは明らかに街道と共に発達した遺跡である。集落跡以外では、同じように街道を見下ろす尾根上には南北朝から戦国時代にかけての城塞が20数か所分布している。生産遺跡としては平安時代末から中世にかけての炭焼き窯と思われる窯跡が市内の山間部に分布している。

近世になると近江膳所藩や河内西代藩の陣屋跡があり、さらに、確認数は少ないが、瓦窯も地元の伝承通り確認されている。

III. 調査の結果

1. 本多藩陣屋跡

(1) 調査に至る経過

当遺跡の調査は文化会館建設に先立ち実施したものである。

当該建設予定地は河内西代藩本多家の陣屋が置かれていた場所で周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれるため、事業主体者で主管担当課である企画調整室と埋蔵文化財の取り扱いについて協議をすすめた。その結果、予定地内については遺構確認のため試掘調査を実施した。結果、建設予定地のうち400m²について遺構が確認され、この部分について記録保存を実施することとなった。調査については河内長野市遺跡調査会が市の委託を受けて実施することになった。調査は平成元年2月6日から平成元年3月31日まで行なった。



第2図 本多藩陣屋跡調査地位置図

(2) 位置と環境

当該遺跡は西代神社から長野小学校、長野中学校を中心として広がる遺跡である。

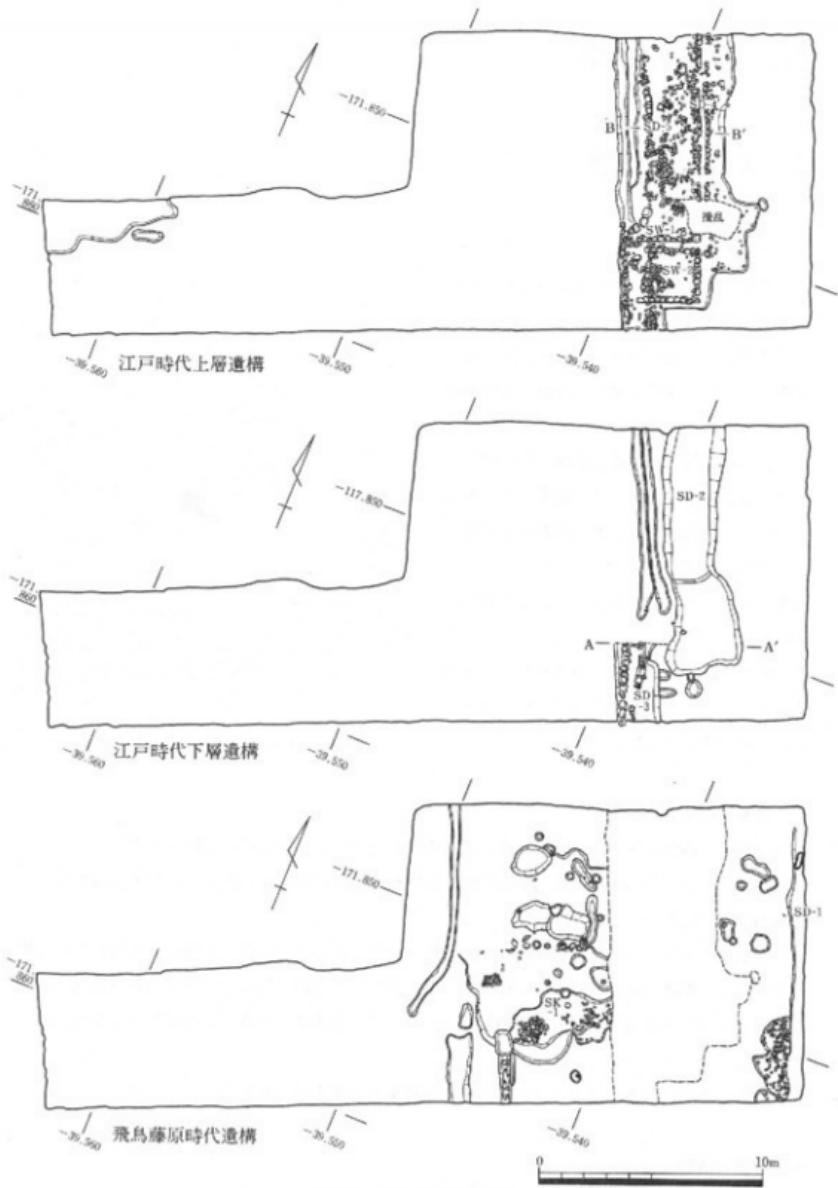
調査地は国道170号線の南側、旧市役所庁舎跡地で石川左岸の河岸段丘上に所在するもので、標高約120mを測った。

この遺跡の位置する段丘は台地状を呈し、南の石川に向かって大きく3段程度の段をなして標高を下げる。遺跡の位置は最も広い最上段（中位段丘）の南端に位置し、今回の調査地は、最上段より3m程度下がったテラス状の地形を呈している。調査地の南側は、標高差10m程度の段丘崖となっている。

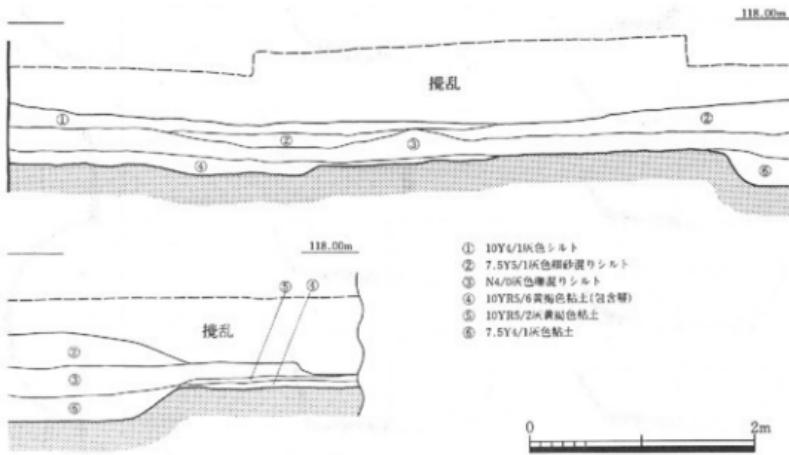
当遺跡の東川には西代藩の本家である近江膳所藩河州出張所の跡がのこっている。

(3) 遺構と遺物

遺構



第3図 調査区遺構配置図



第4図 調査区南側壁土層図

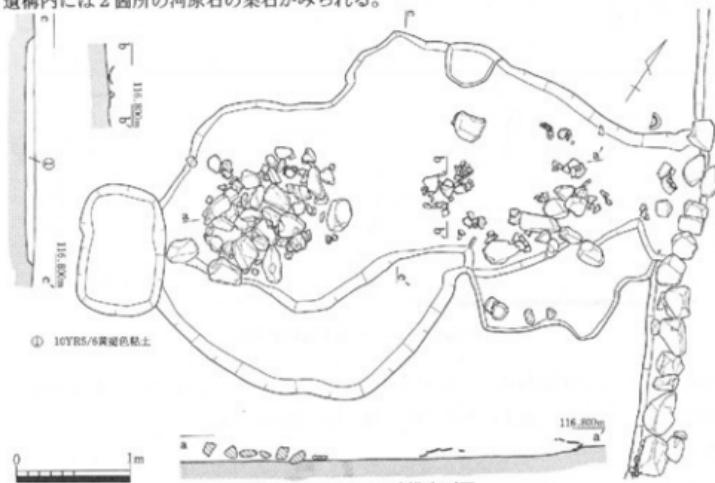
A. 飛鳥藤原時代

この時期の遺構は、不定形を土坑と満、ピットが確認されただけである。

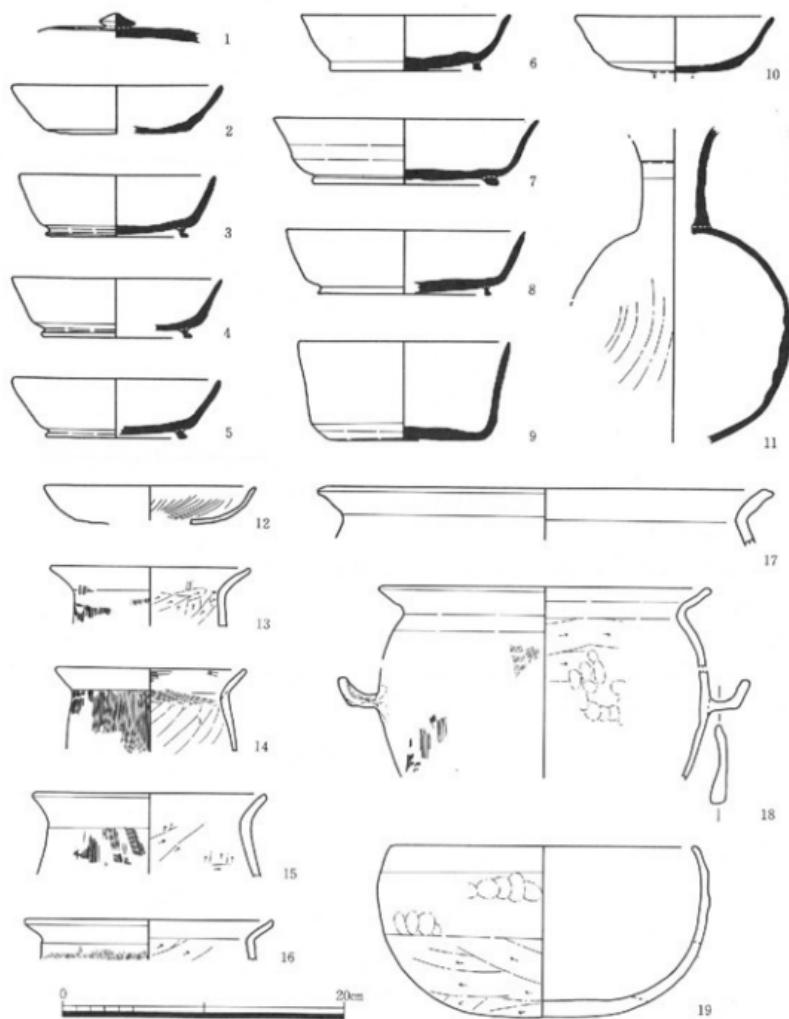
〔土坑〕

SK-1

調査地の中央で検出され、平面形は不定形を呈する。長径4.5m、短径3.5m、深さ0.3mを測る。遺構内には2箇所の河原石の集石がみられる。



第5図 SK-1 遺構実測図

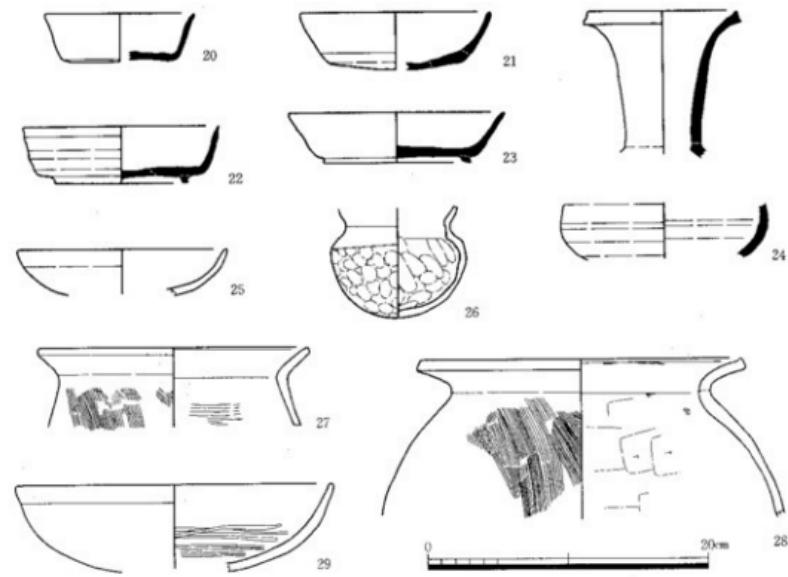


第6図 SK-1 出土遺物実測図

出土遺物は多く、須恵器壺蓋（1）、壺身（2～8）、壺（9）、高壺（10）、提瓶（11）、土師質壺（12）、甕（13～17）、把手付き壺（18）、鉢（19）が図示できた。

〔満〕

S D - 1



第7図 SD-1出土遺物実測図

調査地の東端を南北に走る溝である。溝の東側肩部は調査区外になるため全容は不明である。溝の深さは0.3mを測る。

遺物は須恵器坏身（20～23）、長頸壺（24）、土師質坏（25）、小型丸底壺（26）、甕（27・28）、鉢（29）が図示できた。

B 江戸時代

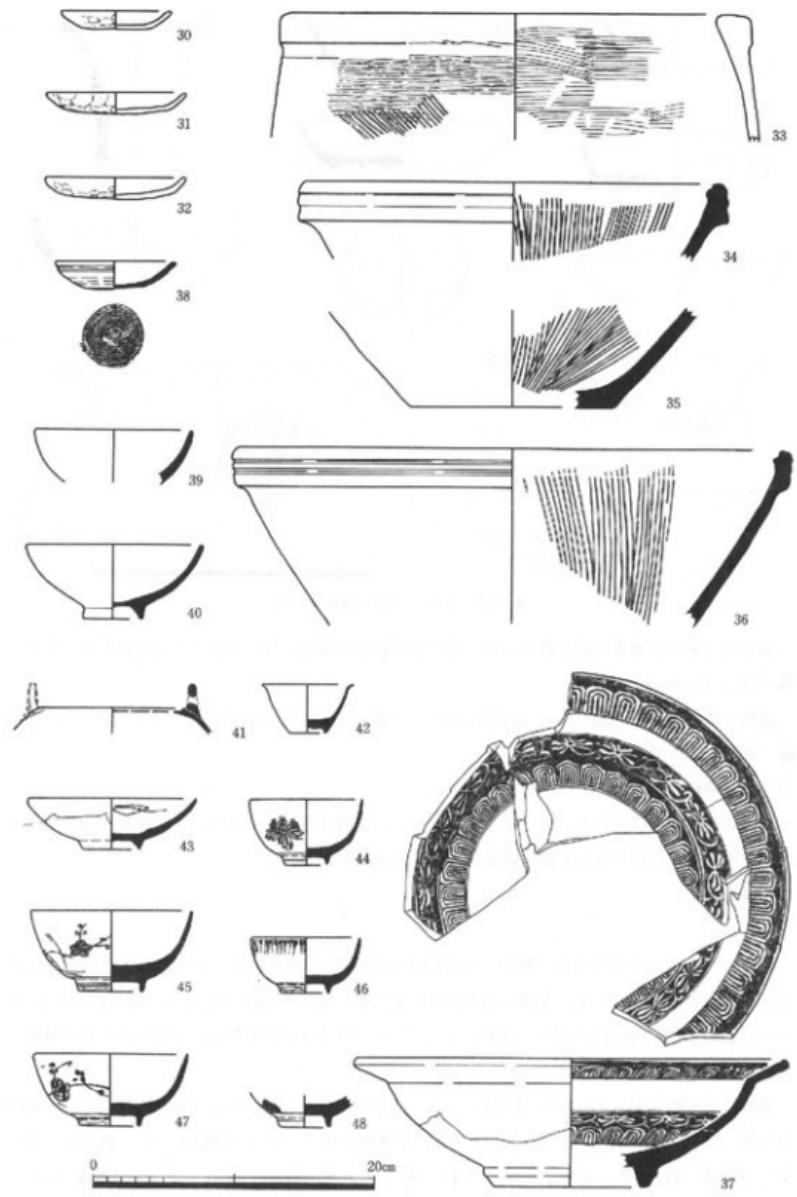
この時代の遺構は2時期に分けることができる。遺構は溝のみ確認された。堀状の溝2条とそれが埋まつた後に作られた石組の溝や方形の石組遺構である。

〔溝〕

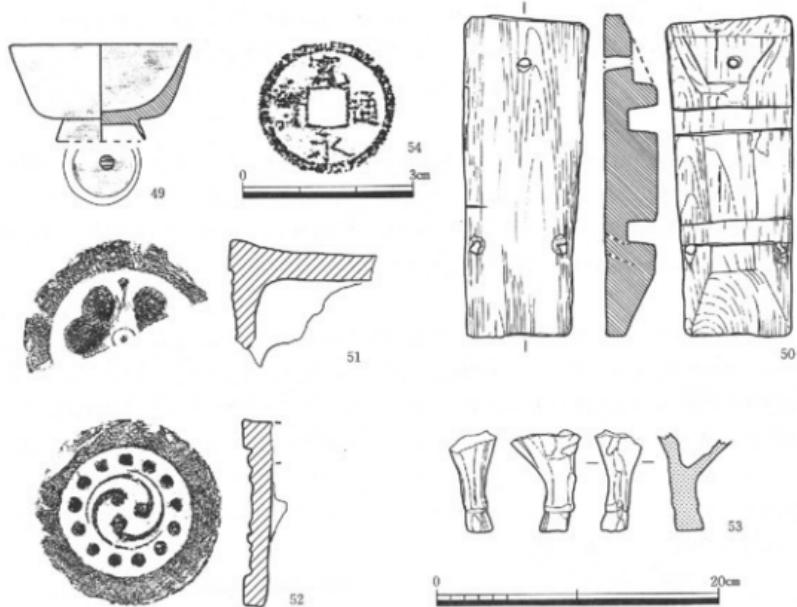
SD-2

調査区の中央よりやや東側で検出された約30°西に偏して南北に走る溝である。北側調査区壁面から11mで終わっている。北側は調査区外に伸びる。幅は平均的に約2.5m、底部は幅1.5m深さ0.4mで、南端3mは約0.2m一段浅くなっている。埋土は上層が疊層、下層が粘土層が堆積している。

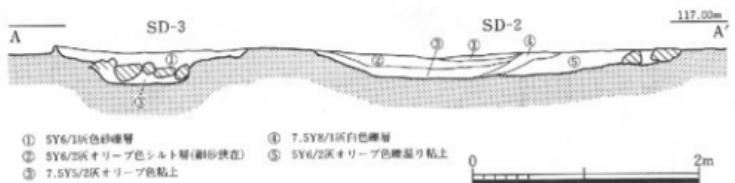
遺物は土師質小皿（30～32）、漆焼甕（33）、備前焼すり鉢（34～36）、唐津焼鉢（37）、施釉陶器小皿（38）、青磁碗（39）、瀬戸焼碗（40）、美濃焼水注？（41）、綠釉碗（42）、磁器皿（43）、伊万里焼碗（44～48）、漆器椀（49）、下駄（50）、軒丸瓦（51・52）、ミニチュア土製品（53）、銅錢（54）が図示できた。



第8図 SD-2出土遺物実測図(1)



第9図 SD-2出土遺物実測図(2)



第10図 SD-2・SD-3遺構実測図

SD-3

調査区の中央よりやや東側で検出された約30°西に偏して南北に走る溝である。南側調査区壁面から4mで終わっている。南側は調査区外に伸びる。位置的にはSD-2の西侧約0.5mを端部2m程度が平行して走っている。幅は端部1mが約1.3m、それから東側肩部が0.7m広がっている。底部は幅1.5m深さ0.4mである。溝内部西側には1段の石組が成されている。西側は端部1m分が残存していた。



第11図 SD-3出土遺物実測図

石組内法0.4m、使用されている石は河原石で40×30×45cm程度のものである。溝全体はもともと石組が成されていたようである。埋土は上層が礫層、下層が粘土層が堆積していた。

遺物は伊万里焼碗（55）、瀬戸焼碗（56）、ミニチュア土製品（57）が図示できた。

SD-4

調査区の中央よりやや東側で検出された約30°西に偏して南北に走る石組溝である。この溝はSD-2が埋没した後に設置されており、北側調査区壁面から7mで搅乱のため消失している。北側は調査区外に伸びる。幅は石組内法で約0.2m、深さ0.2mで、使用された石は約30×30×20cm程度の河原石の角面を内側に揃えて据えられている。

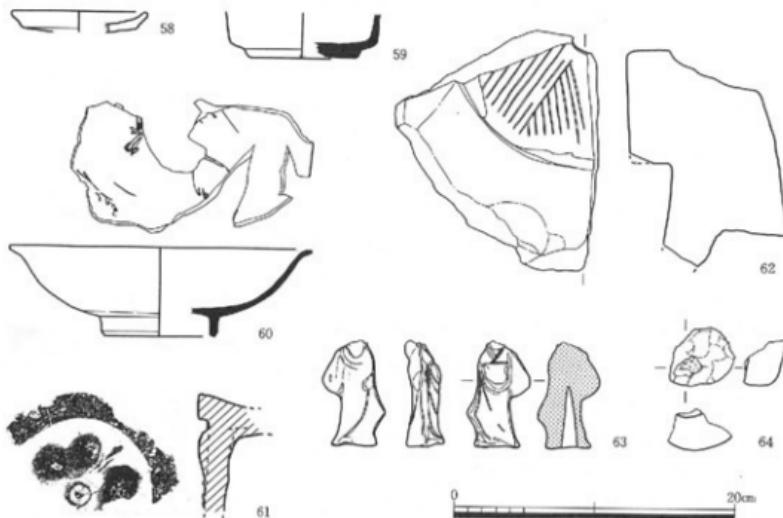
SD-5

調査区の中央よりやや東側で検出された約30°西に偏して南北に走る石組溝である。この溝はSD-2が埋没した後、SD-2の東側肩部にSD-4と約3m離れて平行に走る。この溝も北側調査区壁面から7mで搅乱のため消失し、更に石組の石も大半消失している。幅は石組内法で約0.2m、深さ0.2mで、使用された石は約30×30×20cm程度の河原石の角面を内側に揃えて据えられている。SD-4と一対のものであろう。

遺物は土師質小皿（58）、青磁香炉（59）、瀬戸焼鉢（60）、軒丸瓦（61）、石臼（62）、ミニチュア土製品（63）、



第12図 SD-4・SD-5 造構実測図



第13図 SD-4・SD-5 出土遺物実測図

鉄型（64）、が図示できた。

〔石組遺構〕

SW-1

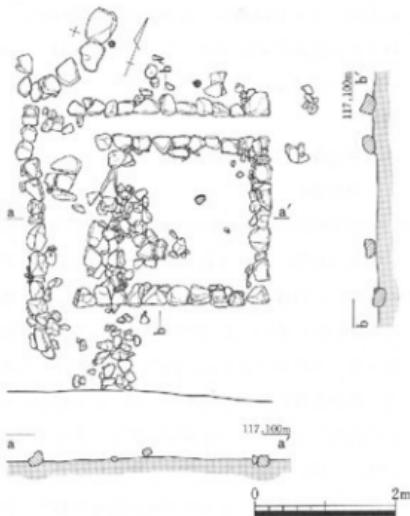
調査区の中央よりやや東側で検出された約60°東に偏して東西に約4m走る石組である。石組約30×30×20cm程度の河原石の角面を南側に揃えている。

遺物は出土していない。

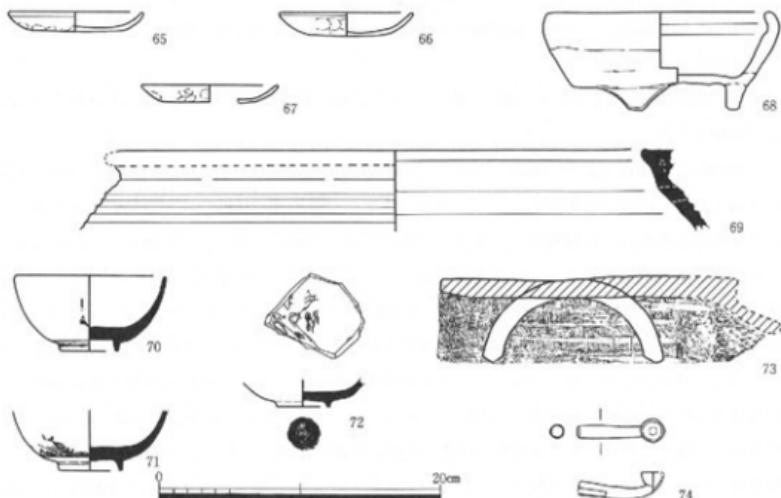
SW-2

調査区の中央よりやや東側で検出された方形の石組である。一辺約3.5mを測る。石組は一段で約30×30×20cm程度の河原石の角面を西側以外、外側に揃えている。西側片はそのまま南側に伸びている。

遺物は土師質小皿（65～67）、火舎（68）、備前焼甕（69）、伊万里焼碗（70・71）、磁器碗（72）、丸瓦（73）、キセル（74）が図示できた。



第14図 SW-2 遺構実測図



第15図 SW-2 出土遺物実測図

まとめ

以上の遺構のうち、SD-4・5 及び SW-1・2 は方向等から一連の遺構とおもわれ、とくに SW-1・2 は溝の一方の肩部の可能性がある。SD-4 を延長すれば SW-1・2 の面と平行するか直角に対応する。このため、SD-4・5 の間 SW-2 の内側に何らかの施設があった可能性がある。

遺物

A. 飛鳥藤原時代の遺物

〔須恵器〕

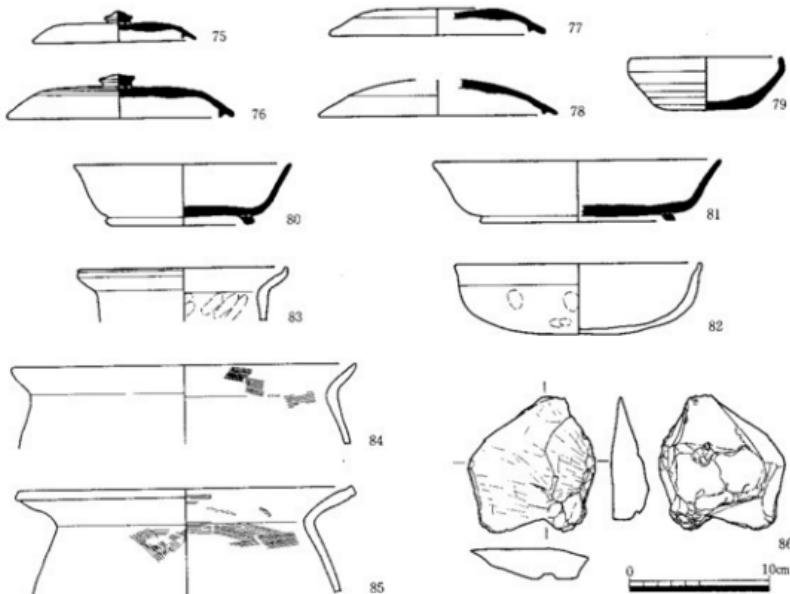
坏蓋(1・75~78)、坏身(2~8・20~23・79~81)、高坏(10)、長頸壺(24)、提瓶(11)などが出土した。坏壺(1・75~78)は若干欠損するものもあるが、いずれもやや平坦や天土部中央に擬宝珠つまみを有し、口縁部に短いかえりを持つもの。坏身は底部に高台を伴うもの(3~8・22・23・80・81)と、伴わないもの(2・20・21・79)がある。口径約15cm前後と約17cm前後のものがあり、口縁部形態も外上方に伸びるもの、内寄気味に伸びるもののがみられる。高台は底端部に「ハ」の字状に付く。高台を伴わないもので、(20)は平底から屈曲し、口縁部が外反して伸びる。(79)は平底から内湾して伸び、口縁端部をややつまみ上げ状に収めるもの。(9)は口径14.8cmを測る深型の坏。(10)は脚部を欠損する高坏壞部で、口径約14cmを測るもの。(11)は丸みのある体部に長頸を伴う提瓶で、体部最大径約17cmを測り、内面には粘土の蓋の痕がみられる。外面には自然釉が付着する。(24)は復元口径10.6cm、体部最大径14.8cmを測る長頸壺で、肩部を欠損するが口縁端部は肥厚し内向する面を成す。外面には自然釉が付着する。

出土した須恵器は、いずれも陶邑編年でIII-3~IV-1に相当すると思われる。

〔土師器〕

坏(12・25・82)、小型丸底壺(26)、甕(13~17・27・28・83・85)、把手付き壙(18)、鉢(19・29)などが出土した。

(12・25・82)は底部から口縁部がゆるやかに立ち上がる坏で、(12・25)は口径約15cm、器高約3cmを測り、内面に放射線状のヘラミガキを施す。(82)は口径約18cm、器高約5cmを測り、やや深みのあるもの。口縁端部はつまみ上げ状に収め、内面は丁寧なナデを施す。(26)は丸みのある体部から頸部で締まり、口縁部は屈曲し、外上方へ伸びる小型丸底壺で、体部最大径約10cmを測る。体部にユビオサエの痕が著しく、やや粗なつくりのもの。甕の形態として、(13~16・27・83・85)は、寸胴の体部から口縁部はゆるやかに屈曲し、ややつまみ上げ状に収める端部に至るもので、外体面にハケ目、内面にユビオナデを施す。頸部が「く」の字形に屈曲するものでは、口縁端部を外方へややつまみ出し状に収めるもの(17)と、やや尖り気味に丸く収めるもの(84)がある。(28)は丸みのある体部から頸部で弯曲し口縁部が開くもので、口縁端部は縁帯を成し、外面はハケ目、内面はナデを施す。(18)は口径約24cmを測る壙で、丸みのある体部に舌状の把手を伴い、頸部は屈曲し開く口縁部を有する。外体面にはハケ目、内面にはユビオサエの痕がみ



第16図 下層包含層出土遺物実測図

られる。(19)は口径約21.5cm、器高約10.3cmを測る深鉢で、平底からゆるやかに立ち上がって直上し、口縁部で内向し端部はつまみ出して終わるもの。外表面は所々にユビオサエの痕がみられる。底部にススが付着している。(29)口径約23cm、器高約7cmを測る鉢で、底部よりゆるやかに立ち上がり外上方へ伸びるもの。内面にヨコ方向のヘラミガキがみられる。

出土した土師器は、おおよそ7世紀後半から8世紀(飛鳥III～平城宮1～II)に相当すると思われる。

B. 江戸時代の遺物

〔土師質土器〕

小皿(30～32・58・65・67)、火舎(68)などがみられた。

(30～32・65・67)は口径約8～10cm、器高約1.3～1.7cmを測る白色系の小皿で、平底から口縁部がゆるやかに立ち上がるものの、外面はユビオサエ、内面はナデを施す。(58)は底部から口縁部が屈曲して開くもの。(68)は火舎で、平底から屈曲して外上方に伸び、口縁部が内向して終わる。底部には三方向に脚が付く。

〔漆焼壺〕

(33)は漆焼壺口縁部片で、断面逆台形を呈し、端部に面を持つもの。外面は並行タタキ、内面には粗いハケ目を施す。

〔備前焼〕

すり鉢（34～36）、甕（69）などがみられた。

すり鉢（34～36）は、口縁部を肥厚して上方に伸び、口縁部外面には凸線が巡り、口縁部内面に段を持つもの。内面には数条単位の縦スリ目が施される。（69）は甕の口縁部で、端部を欠損するが口縁部が直上して伸びた後、端部を外方へ肥厚し平面を成すもの。外体面に数条のカキ目を施すもの。

〔唐津焼鉢〕

（37）は口径30.2cm、器高9cm、高台径10.8cmを測る輪高台を有する三島唐津の平鉢で、体部は内弯して伸び口縁直下で屈曲して開くもの。内面には区画された文様帯を持つ。

〔瀬戸焼鉢〕

（60）は口径21.6cm、器高6.4cm、高台径8cmを測る鉢で、体部はゆるやかに立ち上がり口縁部が外反するもの。内面見込部には色彩の山水図がみられる。

〔伊万里焼碗〕

出土遺物中最も多く出土した。外面の図柄もバラエティに富む。

（42）は口径6.6cm、器高3.5cmを測る煎茶碗で、口縁部が外反して終わるもの。（45・47・92・93）は「梅花図」、（48・55・70・71・91）は「草花文」、（44）は「楓」の印判を施す。（46）は「雨降り柳文」、（88）は外面および口縁部内面に「線文」を施す。（90）は大小の「円文」を呈す。（89）は小鉢で、内面に「八宝図」、外面に「八宝文」を施す。

〔その他の施釉陶磁器〕

（38）は口径8.4cm、器高2cmを測る小皿で、内面及び外面口縁部を施釉するもの。底部には糸切りの痕がみられる。（39）は口径11cmを測る青磁碗。（59）は幅の広い削りだし高台を伴う青磁の香炉。（40・56）は淡黄色釉を施す瀬戸焼碗。（43）は磁器皿で、内面に文様を施し、見込部を蛇の目状に釉剝ぎするもの。（72）は磁器碗で、見込部に文様を施し、高台内露体部に銘を刻む。（41）は褐色釉を施し、肩部に直立する把手を伴うもので、おそらく美濃焼の水注と思われる。

〔木製品〕

漆器椀（49）、下駄（50）などが出土した。

（49）は口径12.8cm、器高7cmを測る内外両面塗りの漆器椀で、底部より立ち上がり直線的に外上方へ伸びるもの。底部にはやや押し潰され変形しているが、高い高台が付く。高台内に朱で「○」が記されている。（50）は長さ23cm、幅8cm、厚さ3.7cmを測る下駄で、裏面の前後左右を斜めに削って断面逆台形を呈し、間に切り込みを入れるもの。鼻緒の穴は表から裏に向かって開けられている。

〔瓦類〕

軒丸瓦（51・52・61）、丸瓦（73）などがみられた。（51・61）は「三葉の葵」をモチーフにした



第17図 下層包含層出土遺物実測図

本多家家紋を施す軒丸瓦。

(52) は左巻きの三ツ巴文に13個の大きな連珠を施す軒丸瓦。(73) は玉縁部を欠損するが、残存長24.3cm、高さ6.2cm、弧幅13cm、厚さ1.5cmを測る丸瓦で、内面には板状工具によるナデの痕がみられる。

〔石製品〕

(62) は花崗岩製の下臼で、中央部に芯木穴がみられる。目はおそらく1区8分画施される。

〔金属製品〕

キセル(74)、銅鏡(54)などが出土した。

(74) は銅製のキセル雁首で、銅板を丸めて円筒形にしたものに、火皿を接合するもの。雁首長6.3cm、雁首径0.85cm、火皿径1.35cmを測る。(54) は「寛永通宝」で、外径2.4cm、厚さ0.1cm、質量1.75gを測る。

〔ミニチュア土製品〕

(53) は牛足で、残存高7.3cm、幅5cmを測るもので、所々に釉が付着する。(57) は「天神座像」で、最大高4.4cm、幅3.7cm、厚さ2cmを測る。(63) は「人物立像」で、残存高7.6cm、幅3.7cm、厚さ2.7cmを測る。いずれも土師質のもので、表型と背面型の型合わせづくりの為、合わせ目にヘラケズリがみられる。

〔その他の出土遺物〕

細片ではあるが、鋳型片(64)が出土した。4.1cm×4.4cm×2.3cmを測るもので、表面は焼けで白色化し、内面には鉄が融解したものが付着している。断面は熱を受け、赤燈色を呈す。

〔まとめ〕

出土遺物から主に飛鳥藤原時代(7世紀中頃～8世紀)のものと、江戸時代(17世紀以降)のものがみられた。この調査区以外からも同時期に相当する調査遺構がいくつか検出されている。

(4) まとめ

調査の結果、予想外の7世紀後半の遺物が出土した。遺構は明確なものは検出しなかったが、この付近に、この時期の遺構が広がることを示唆している。

また、江戸時代の遺構については、調査前から西代藩の陣屋関係遺構が検出されると予想された。結果的には、石組の溝や堀状の素掘溝が検出された。これらの遺構が陣屋と直接関係を持つことは、出土した本多家の家紋を施した軒丸瓦からも確実と考えられる。

河内西代藩は近江と河内錦部郡に領地を持つ近江膳所藩7万石が、延宝7年（1679年）に時の藩主本多康将が次男忠恒に1万石を与え、その子忠統が宝永元年（1704年）に河内西代に居所を構えたものである。この後、享保17年（1732年）伊勢神戸に移封された。この陣屋は宝永元年から享保17年までの28年間置かれたものである。

陣屋に関しては享保17年（1732年）の「河州錦部郡西代村絵図」に、陣屋が描かれている。しかし今回の調査地は絵図から見れば陣屋の位置から外れ、民家が描かれている場所である。このことは、今回の遺構が民家関係のものではないことは明白であり、絵図の制作された以前に何らかの陣屋関係の遺構が存在したと考えられる。

2. 高向遺跡 TKO89-1

(1) 調査に至る経過

当遺跡の調査は高向地区防火水槽築造に先立ち実施したものである。

当該建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地高向遺跡に含まれるため、事業主体者で主管担当課である消防本部総務課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議をすすめた。その結果、予定地内については遺構確認のため試掘調査を実施した。結果、遺構が存在することが確認され、この部分について記録保存を実施することとなった。調査については河内長野市遺跡調査会が市の委託を受けて実施することになった。調査は平成元年9月27日から平成元年10月6日まで行なった。調査面積は25m²である。

(2) 位置と環境

当該遺跡は石川の左岸の中位段丘に広がる縄文時代から中世の複合遺跡である。

今回の調査地は段丘への段丘崖に近接するところで、現在市立高向公民館の駐車場となっているところである。標高148mを測る。

この遺跡の南側には高向神社、東側には懸持寺跡が位置する。また、調査地の西側、この段丘の中央部では国道170号線建設に先立ち、調査が実施され、縄文時代の遺物から中世にかけての遺構が検出されている。

(3) 遺構と遺物

遺構

今回の調査では、8世紀代の遺構と鎌倉時代の遺構が検出された。

A 奈良時代

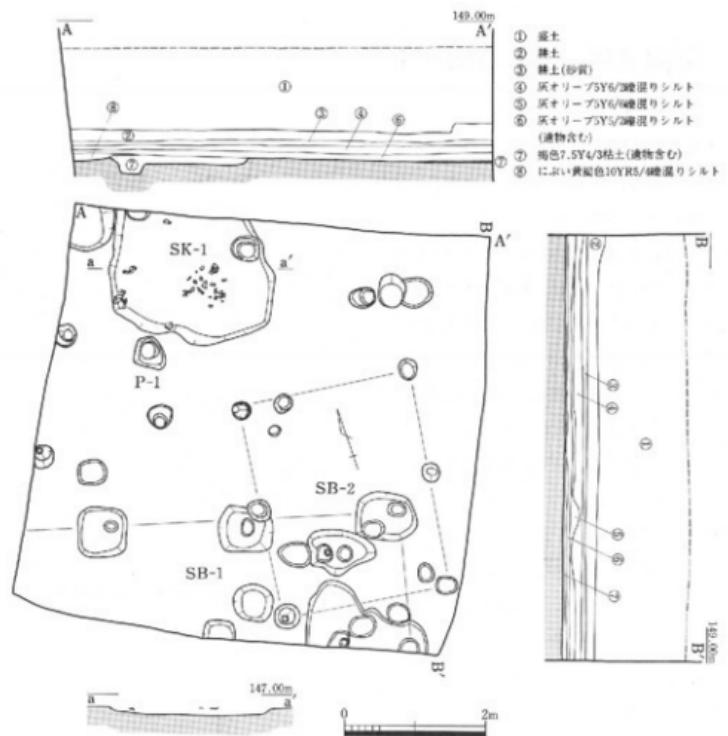
〔掘立柱建物〕

S B - 1

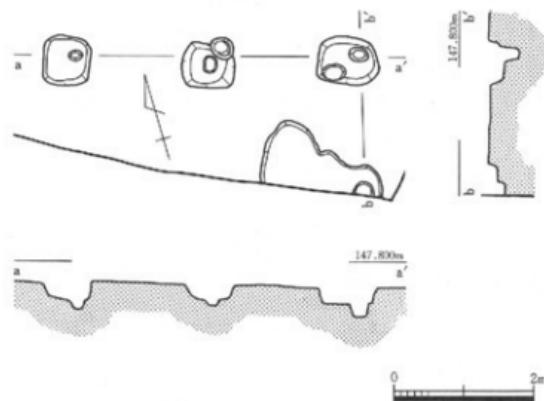
全容は判明しないが、方形の堀方をもつ大型の建物のようである。東西2間(4.2m)以上、



第18図 高向遺跡調査地位置図



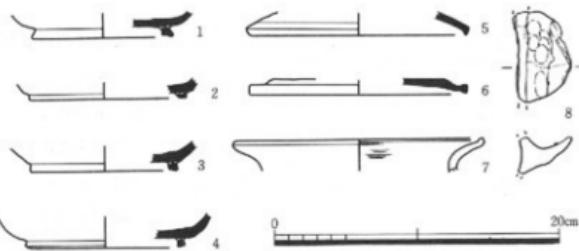
第19図 調査区遺構実測図



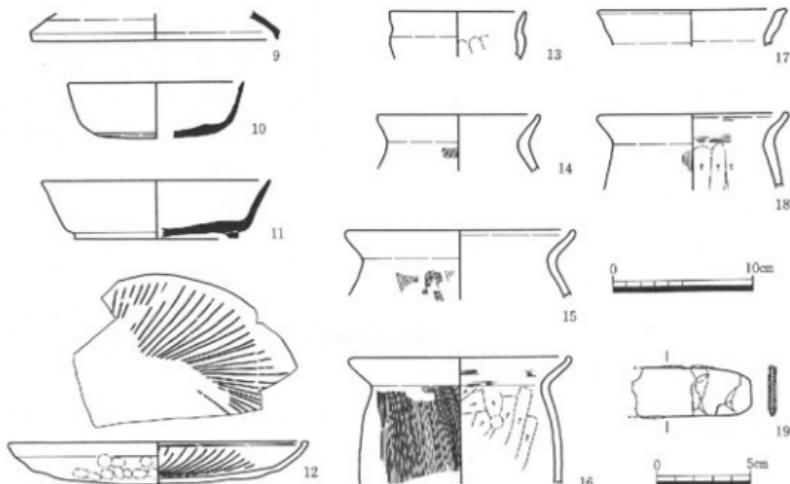
第20図 SB-1 遺構実測図

南北1間(2.1m)以上、柱間は2.1mを測る。柱穴は掘方の1辺0.6m、径0.3m、深さ0.4mを測る。主軸はN-15°-Eを示す。

遺物は柱穴内から須恵器坏身(1~4)、坏蓋(5・6)、土師器底(7)、壙の把手(8)が図示できた。



第21図 SB-1出土遺物実測図



第22図 SK-1出土遺物実測図

〔土坑〕

SK-1

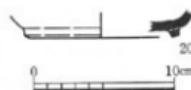
平面形が楕円形を呈するもので、一部は調査区北側に広がる。長径は2m以上で深さは0.5mを測る。埋土中には焼土・炭を含んでいた。

遺物は須恵器坏蓋（9）、坏身（10・11）、土師器皿（12）、土師質壺（13）、甕（14～18）、鐵製鎌（19）が図示できた。

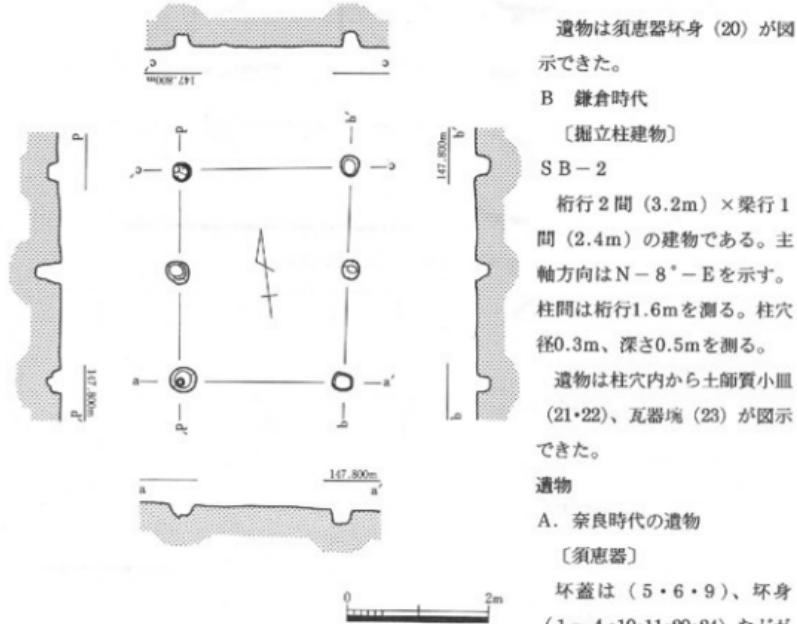
〔遺物出土ピット〕

P-1

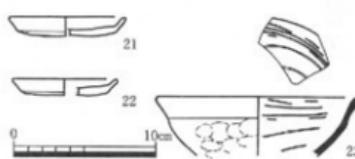
SK-1の南側に位置する2段掘りのピットである。平面形は不定形であるが2段目は円形を呈する。長径0.53m、短径0.45m、深さ0.25mを測り、2段目は径0.25～0.28mを測る。



第23図 P-1出土遺物実測図



第24図 SB-2 遺構実測図



第25図 SB-2 出土遺物実測図

遺物は須恵器坏身（20）が図示できた。

B 鎌倉時代

〔掘立柱建物〕

S B - 2

桁行2間（3.2m）×梁行1間（2.4m）の建物である。主軸方向はN-8°-Eを示す。柱間は桁行1.6mを測る。柱穴径0.3m、深さ0.5mを測る。

遺物は柱穴内から土師質小皿（21・22）、瓦器塊（23）が図示できた。

遺物

A. 奈良時代の遺物

〔須恵器〕

坏蓋は（5・6・9）、坏身（1～4・10・11・20・24）などが出土した。

坏蓋いすれも摘み部を欠くが、やや平坦な天井上部から下垂する端部に至るもの（5・9）と、平坦な天井上部から端部が屈曲し、縁帯を成すもの（6）がある。前者は陶邑編年でIV-1～2、後者はIV-3～4に相当すると思われる。

坏身は底端部にやや変形した高台を伴うもの（1～4・11・22）と、平底から内弯し直線的な口縁部に至るもの（10）、短く内傾する立ち上がり部を有し、全体に歪み変形しているもの（24）などがある。中でも（11）は口径16cm、器高4.2cm、高台径12cmを測り、高台を伴う底部から曲折し、口縁部が直線的に外上方へ伸びるもので、陶邑編年ではIV-2～3に相当すると思われる。

〔土師器〕

皿（12）、壺（13）、甕（7・14～18）、把手（8）などが出土した。

（12）は口径21cm、器高3cmを測る皿で、平底から内弯して立ち上がり、口縁端部を巻き込むもの。内面には放射線状の暗文がみられる。（13）はわずかに外反する口頸部を有する壺で、口径約9cmを測る。甕は口縁部の形態として、（7・14～16・18）は「く」の字状に屈曲する頸部を

有し、口縁端部をややつまみ上げ丸く収めるもので、外面にハケ目、口縁部にヨコナデを施す。

(17) は口縁端部を平坦に収めるもの。口径はいずれも約12~14cmを測る。(8) は幅5cmを測り、舌状に収める楕の把手。

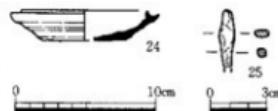
出土した土師器は、主に平城宮IIないしIIIに相当すると思われる。

B 鎌倉時代の遺物

〔土師質土器〕

わずかではあるが小皿(21・22)などの細片が出土した。

(21・22) は、口径約7~8cm、器高約1.3cmを測り、平底から口縁部は屈曲し、外反気味に開くもので、内外面に丁寧にナデを施す。



第26図 下層包含層出土遺物実測図

〔瓦器〕

若干量ではなるが瓦器塊(23)などの細片がみられた。

復元口径14.3cmを測り、丸みを帯びた体部から口縁部は強いヨコナデの為やや外反し、端部を丸く収めるもの。内面にはヨコ方向のヘラミガキがみられる。尾上編年でIII-3に相当すると思われる。

〔鉄製品〕

SK-1(19) は残存長6.4cm、幅2.6cm、厚さ0.2cmを測り、鋲の付着が著しいが鉄製鎌の刃部と思われる。(25) は残存長3.1cm、幅0.8cmを測るが、詳細は不明である。

まとめ

出土遺物から主に奈良時代(8世紀中頃)のものと、鎌倉時代(13世紀後半)のものがみられた。以前の調査においてもこの周辺から同時期の遺構がいくつか検出されており、この地区の時代感がうかがえる。

(4) まとめ

今回の調査区は面積も狭く、各遺構の全容は判明しなかった。しかし、遺構の密度は高く、奈良時代、鎌倉時代の遺構が重複していた。このことは、この調査区の南西側での個人住宅の調査結果とも合致し、高向遺跡は段丘の石川側にこの時期の遺構が集中するようである。

3. ジョウノマエ遺跡 J N M89

(1) 調査に至る経過

当遺跡の調査は石油給油所の建設に先立ち実施したものである。

当該建設予定地は1988年の国道317号線のバイパス工事で発見されたジョウノマエ遺跡の範囲内に含まれるため、原因者と埋蔵文化財の取り扱いについて協議をすすめた。その結果、予定地の内、建物及びタンク埋設部分については建設の段階で破壊されるため、記録保存を実施することになった。調査については河内長野市遺跡調査会が委託を受けて実施することになった。調査は平成2年3月1日から平成2年3月31日まで行なった。調査面積は550m²である。



第27図 ジョウノマエ遺跡調査位置図

(2) 位置と環境

当該調査地は行政区画では河内長野市加賀田に位置する中世の遺跡である。

今回の調査地はバイパス工事での調査地に近接し、北に派生する丘陵の東側斜面突端に位置し、東側に天見川が北流している。

この遺跡の北側には平安時代から中世の複合遺跡の尾崎南遺跡が近接している。また、天見川を挟んだ対岸には三日市遺跡が位置している。

調査は調査区を第1～第3調査区に便宜上区分して実施した。

(3) 遺構と遺物

遺構

今回の調査では、14世紀代の遺構が検出された。

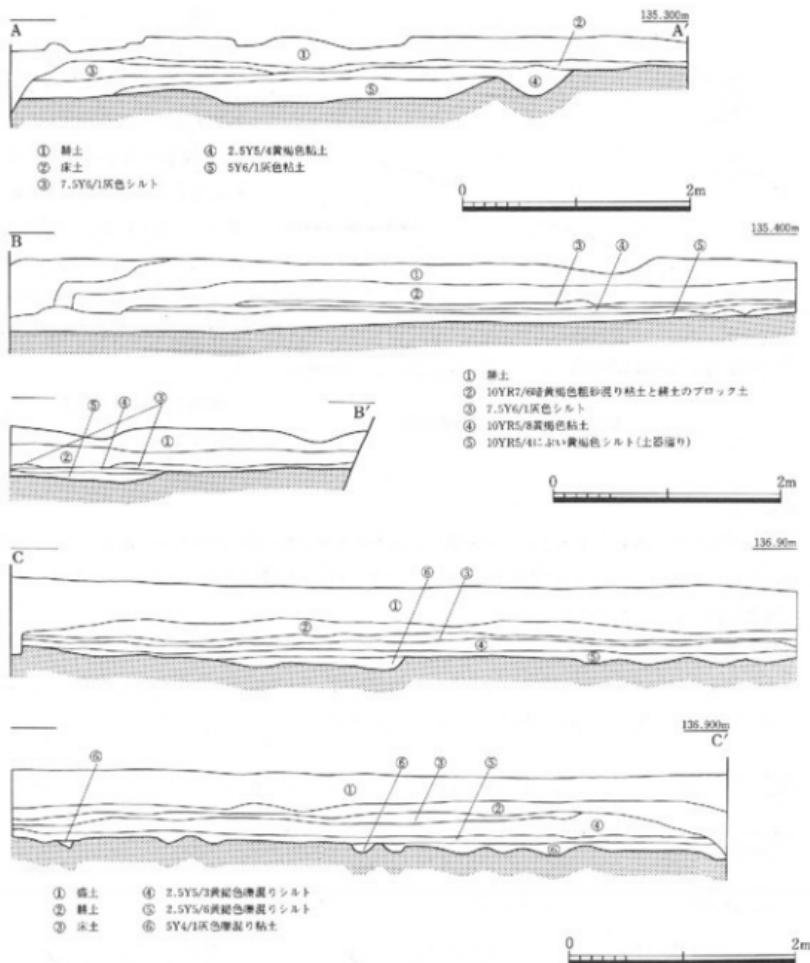
〔土坑〕

S K - 1

第1調査区の中央で検出された平面形が梢円形の土坑である。長径は1.5m、短径1.3m、深さ0.2mを測る。埋土は黄灰色のシルトで埋土中には焼土・炭を含んでいた。

遺物は土師質小皿(4)、瓦器壇(13・14)、ミニチュア瓦質羽釜(19)が図示できた。



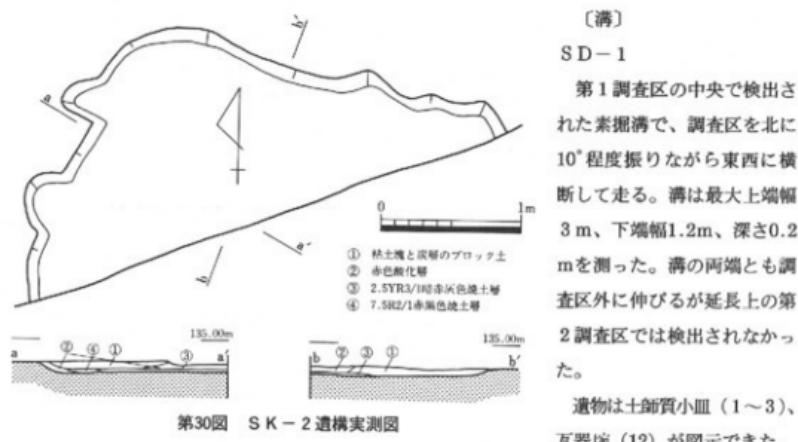


第29図 J N M89 調査区土層図

S K - 2

第1調査区の南端で一部検出された平面形が方形を呈すると思われる土坑である。検出長は短辺で2.3m、長辺で3mを測る。主軸方向は短辺でN-20°-Eを示す。土坑底部は約5cm程度赤色酸化層に変化しており、熱を受けている。また、埋土も焼土が堆積している。

遺物は土師質小皿(5~7)、瓦器小皿(11)、瓦器塊(15~18)が図示できた。



〔溝〕

SD-1

第1調査区の中央で検出された素掘溝で、調査区を北に10°程度振りながら東西に横断して走る。溝は最大上端幅3m、下端幅1.2m、深さ0.2mを測った。溝の両端とも調査区外に伸びるが延長上の第2調査区では検出されなかつた。

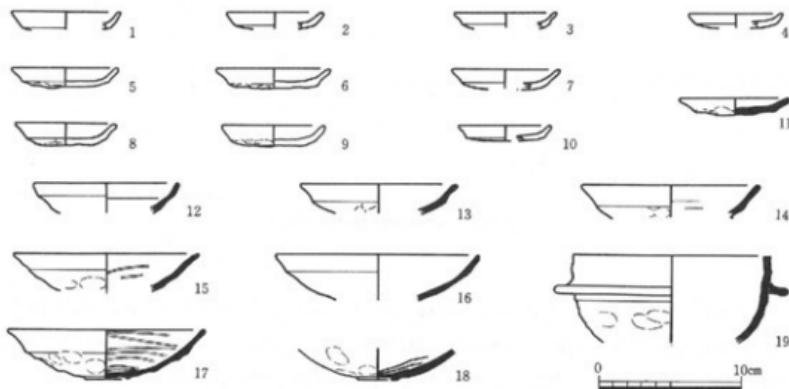
遺物は土師質小皿(1~3)、瓦器塊(12)が図示できた。

SD-2

第3調査区の北西側で検出された素掘溝で、調査区を西に45°程度振りながら南北に5m程度検出され、中央から3m直角に北東方向に検出された。溝の幅は最大1.8m、深さ0.1mを測った。遺物は図示できるものは出土しなかった。

SD-3・4・5

第3調査区の北西端から南東に平行して、やや円弧を描くように走る3条の溝である。いずれも幅0.5~0.7m、深さ0.1mで、埋土は灰色シルトを成す。



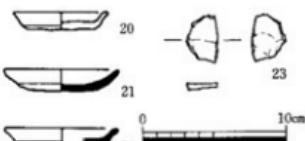
第31図 第1調査区出土遺物実測図

遺物から近世と考えられるが、SD-4・5からはサヌカイト片（32～34）が出土している。

〔出土遺物ピット〕

P-1

第2調査区の南西端で検出された。平面形は橢円形を呈し、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.2mを測る。



第32図 第2調査区出土遺物実測

遺物はサヌカイト片（23）を出土し、埋土も他のピットと様相を異にしている。

上記のピット以外も検出されているが、図示できるものは出土していない。また、建物を復元するまでには至っていない。

遺物

この跡跡からは、土師質土器、瓦器、陶磁器、石器、鉄製品などの遺物が出土した。細片が多く実測図に示すことが出来たのは若干量である。

〔土師質土器〕

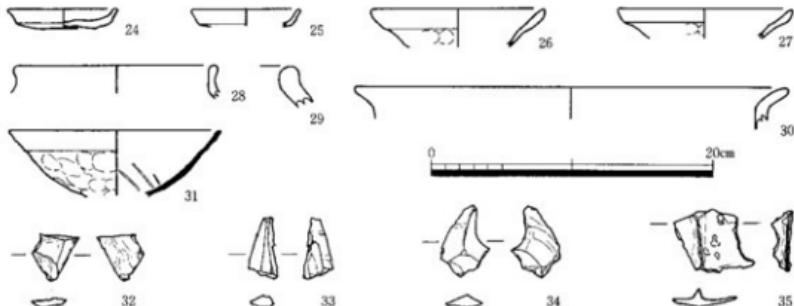
小皿、皿、甕口縁部などが出土した。

小皿は口径約6.6～8.3cm、器高約1.1～1.6cmを測る淡黄色系のもので、底部にユビオサエ痕がみられる。口縁部は強いヨコナデの為やや外反するもの（3・5～8・10）、底部からなだらかに口縁部が立ち上がるるもの（1・2・4・9）、底部から屈曲して立ち上がるもの（20・24・25）などがみられる。（26・27）は口径約12.2cmを測る白色系の皿で、底部より屈曲して立ち上がり口縁部がラッパ状に外上方へ開くもの。口縁端部は肥厚して丸く納める。（28～30）は土師質甕及び羽釜の口縁部片であるが、細片の為詳細は不明である。

〔瓦器〕

小皿、甕、羽釜などが出土した。

小皿は口径約7.8～8.1cm、器高約1.2～1.5cmを測り、ユビオサエを伴う底部から口縁部は屈曲して外上方に伸びるもの（11・22）、やや丸みのある底部からゆるやかに立ち上がるもの（21）な



第33図 第3調査区出土遺物実測図

どがみられた。塙は底部に形骸化した高台を伴うもの（14～18・31）と丸底と思われるもの（12・13）がみられた。前者は口径約12.5～14cm、器高約3cmを測り、内面に粗雑な渦巻き状のヘラミガキを施す。尾上編年でN-2に相当し、おおよそ14世紀中頃のものと思われる。後者は口径約10～11cmを測り、内面にヘラミガキがみられず全体につくりが粗く、尾上編年ではN-4～5に相当し、おおよそ14世紀後半から15世紀にかけてのものと思われる。（19）は口径約14cmを測る小型の羽釜で、口縁部は直立して伸び端部に水平な面を成す。鍔は水平に伸び、外面体部にユビオサエ痕を施す。菅原正明編年では河内D2型に相当し、おおよそ14世紀～15世紀にかけてのものと思われる。

〔その他の出土遺物〕

若干量ではあるが、陶磁器片、石器、鉄製品などがみられた。

図示出来なかった青磁碗の口縁部片、備前焼甕などの細片がみられた。

石製品（23・32～34）はいずれもサヌカイトの剝片で、細かい加工痕はみられず刃部を形成するまでのものと思われる。（35）は中央部が突起しT字型を呈す鉄製品であるが、腐食が著しく詳細は不明である。

まとめ

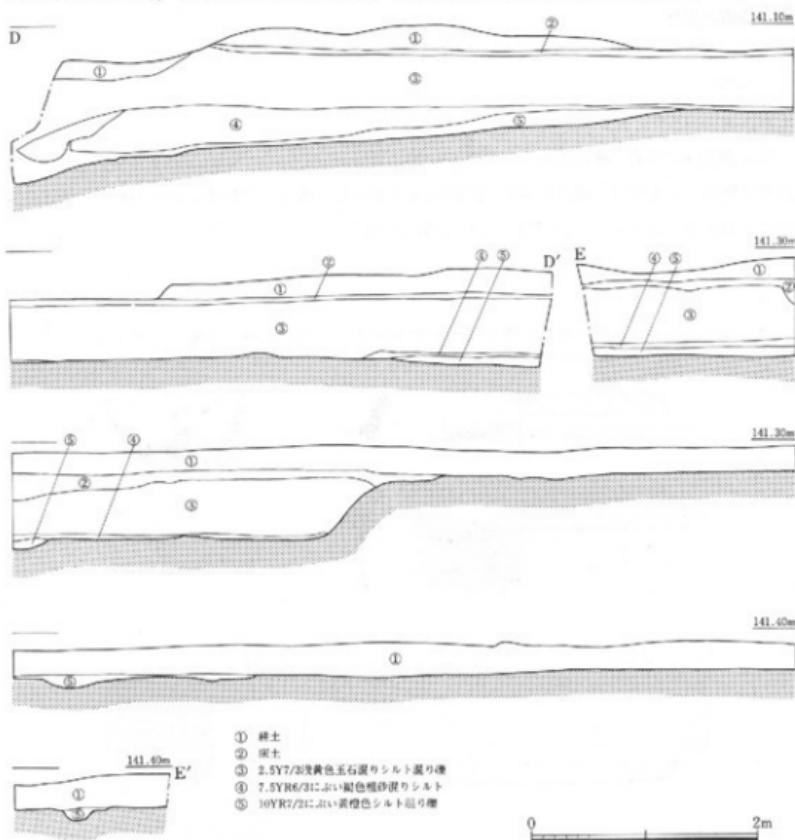
出土した遺物はわずかではあるが、おおよそ14世紀中頃から15世紀にかけてのものが主を成すことから、室町時代末期から鎌倉時代にかけてのものと思われる。

4. ジョウノマエ遺跡 J N M90

(1) 調査に至る経過

当遺跡の調査は共同住宅の建設に先立ち実施したものである。

当該建設予定地は1988年の国道317号線のバイパス工事で発見されたジョウノマエ遺跡の範囲内に含まれるため、原因者と埋蔵文化財の取り扱いについて協議をすすめた。その結果、予定地の内、切土部分については、記録保存を実施することになった。調査については河内長野市遺跡調査会が委託を受けて実施することになった。調査は平成2年9月19日から平成2年11月30日ま



第34図 J N M90調査区土層図

で行なった。調査面積は300m²である。

(2) 位置と環境

当該調査地は行政区では河内長野市北青葉台に位置する。

今回の調査地はJ N M89の調査地とバイパスを挟んで西側に位置している。

この遺跡の北側には平安時代から中世の複合遺跡である尾崎遺跡が近接している。また、天見川を挟んだ対岸には三日市遺跡が位置している。

調査区は第1・第2調査区に分けて実施した。

(3) 遺構と遺物

今回の調査では、明確な遺構は井戸と溝のみであった。

〔井戸〕

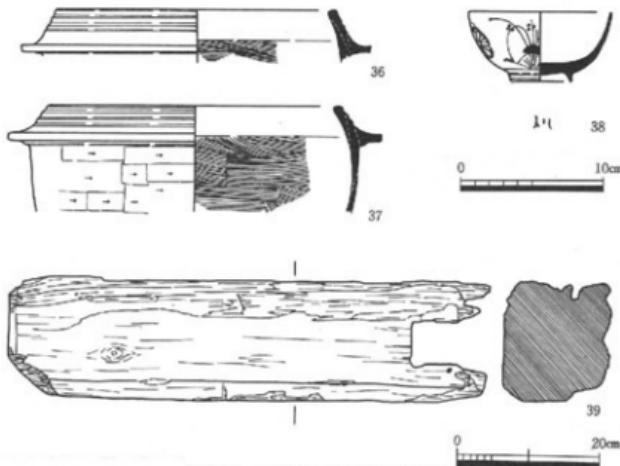
S E - 1

第1調査区の南側で検出された平面形が円形の素掘井戸である。断面は筒形を呈し、底部近くはやや胴膨らみを成す。径は0.8m、深さ2.6mを測った。埋土は灰色系の粘土の堆積である。遺物は瓦質羽釜(36・37)、建築部材(39)が図示できた。

〔溝〕

S D - 1

第1調査区のテラス状の地形に平行に北東に9m走り、更に北西に屈曲し9m走る。幅1m、深さ0.25mを測る。



第35図 J N M90出土遺物実測図

遺物

調査区より出土した遺物は極めて少なく、実測図に示すことができたのはわずかに瓦質羽釜、伊万里焼碗、木製品だけである。

(36・37) は口径約20cmを測り口縁部外面に数状の段を有する瓦質羽釜で、内傾する口縁部の傾きに続けて肩部に短めの鈎を巡らせるもの。内面体部にハケ目を施す。15世紀から16世紀のものと思われる。このほか伊万里焼染付け碗(38)や、図示出来なかったが青磁碗の口縁部片、備前焼甕などの細片がみられた。また、井戸より(39)など数点の木製品が出土しているが、おそらく建材として使用されたものと思われる。

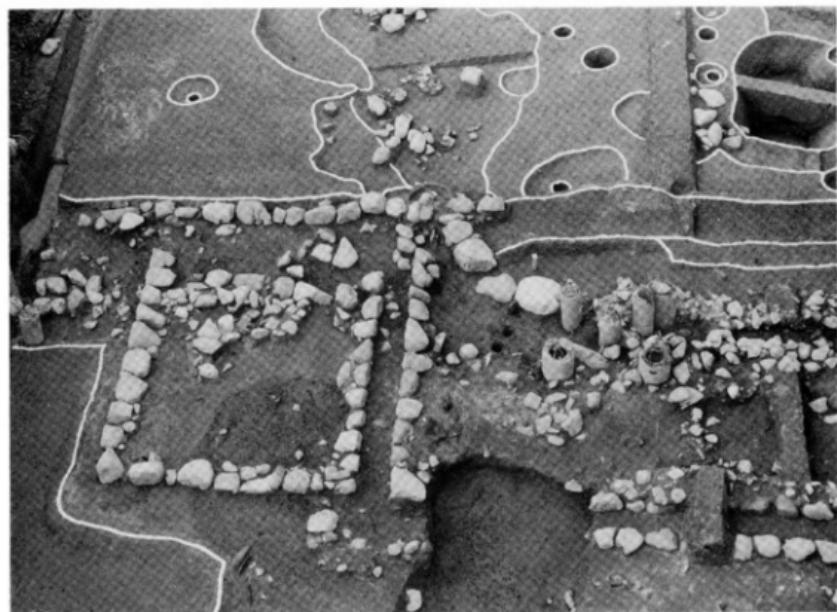
(4)まとめ

以上の調査の結果から、当該地についてはジョウノマエ遺跡の東端部分になるようである。遺跡の中心は遺跡発見当時の88年度、そして89年度調査地と考えられる。遺跡の性格は明確にし得る遺構が少なく、88年度で建物1棟と井戸、89年度では建物は復元まで至らず、遺構の正確な状況は不明である。しかし、時期的には出土遺物から14～15世紀を中心としている。この遺跡の性格を考える上では、その立地が天見川に向かってのびる標高約130mの小尾根の限られたテラス状の地形に分布するのが目を引く。また、この地区の小字名がジョウノマエということから城郭関係の遺跡の可能性が高い。

図版



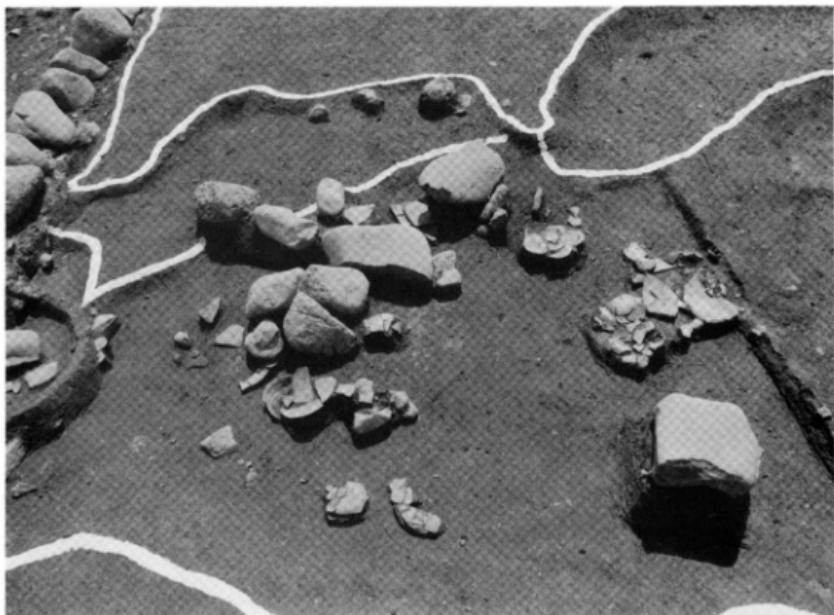
遺跡全景（東から）



SW-1・2（東から）

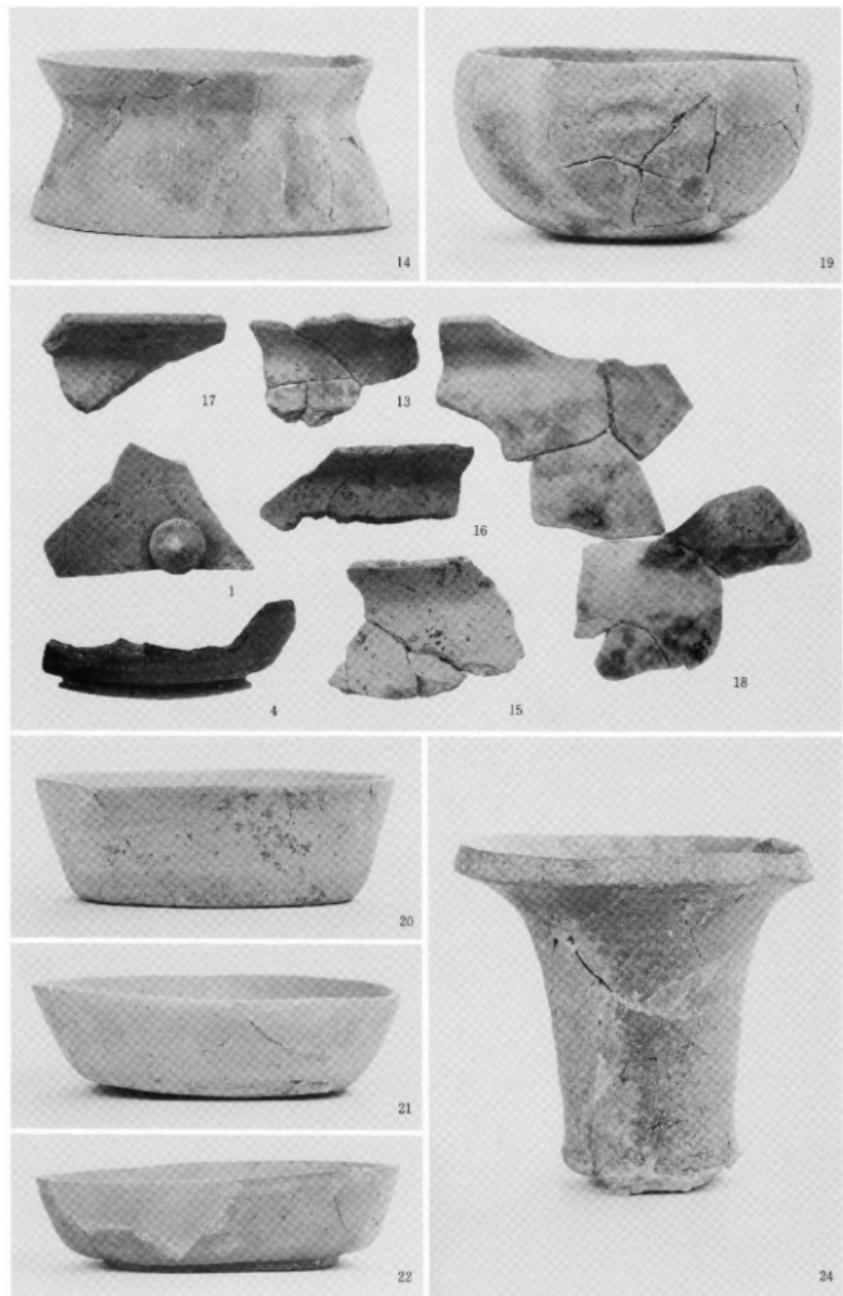


SD-2 (北から)

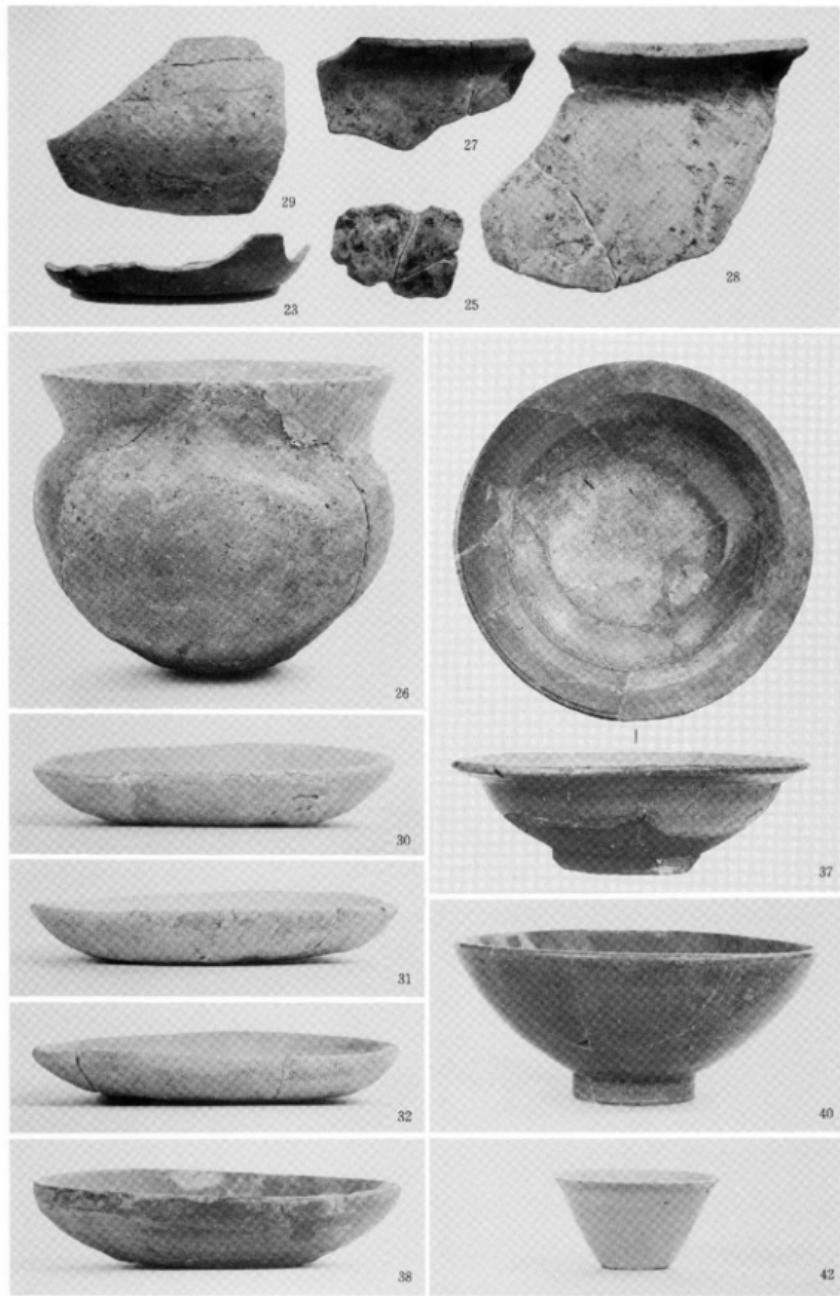


SK-1 土器出土状況

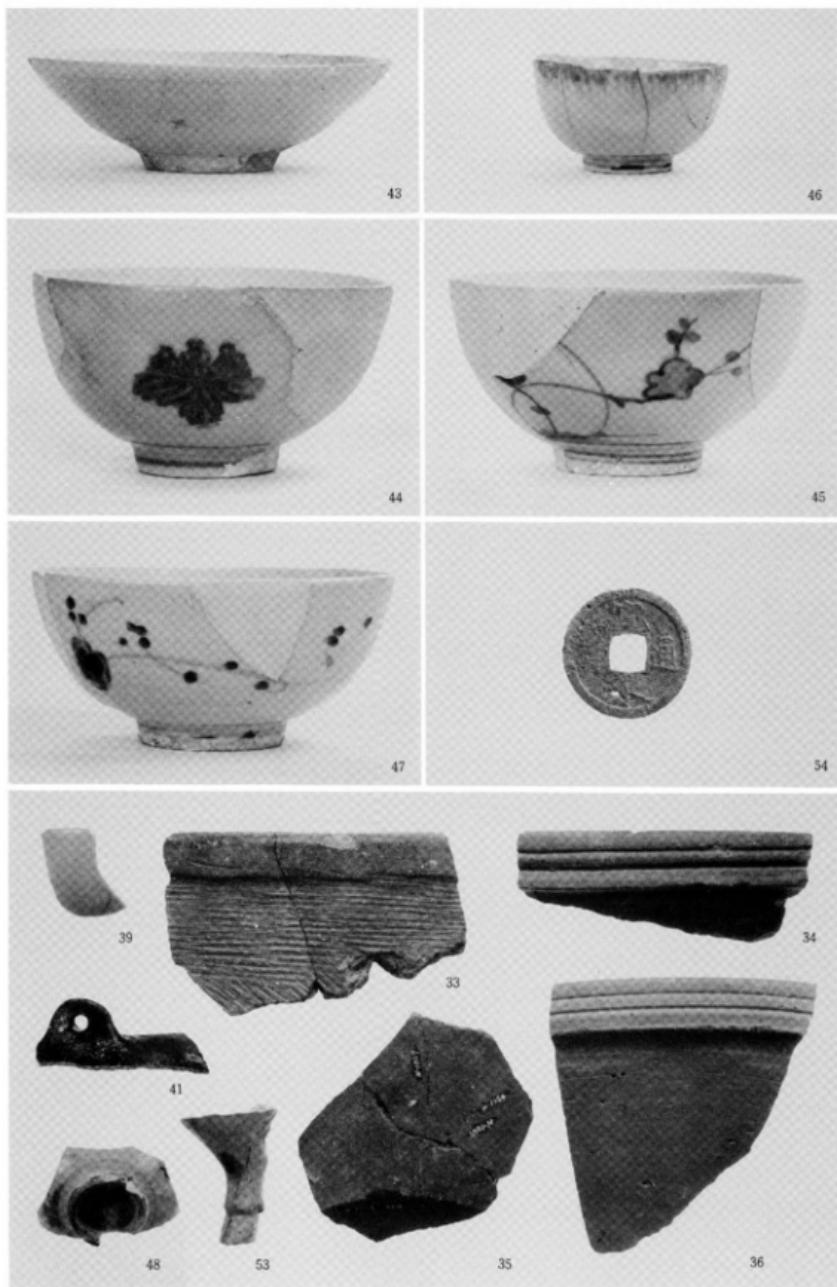




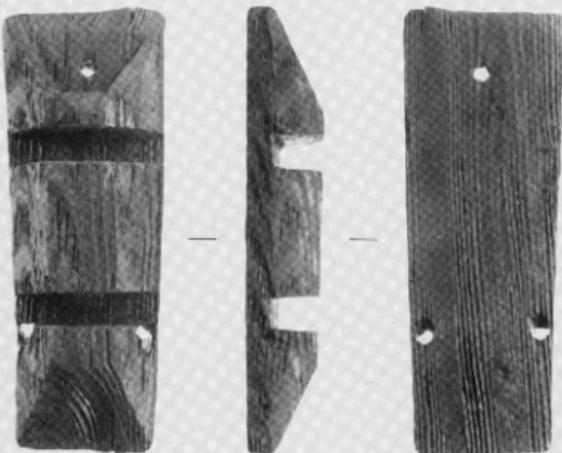
SK-1 (1・4・13~19)、SD-1 (20~22・24)



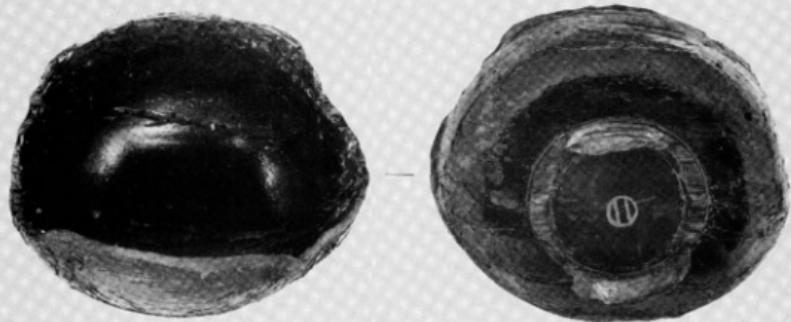
S D - 1 (23・25~29)、S D - 2 (30~32・37・38・40・42)



S D - 2 (33~36・39・41・43~48・53・54)



50



49



57

SD-2 (49・50・57)、SD-3 (57)

60



63



62



68



66



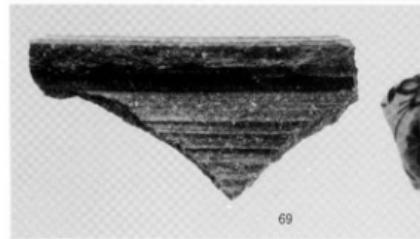
65



70



74



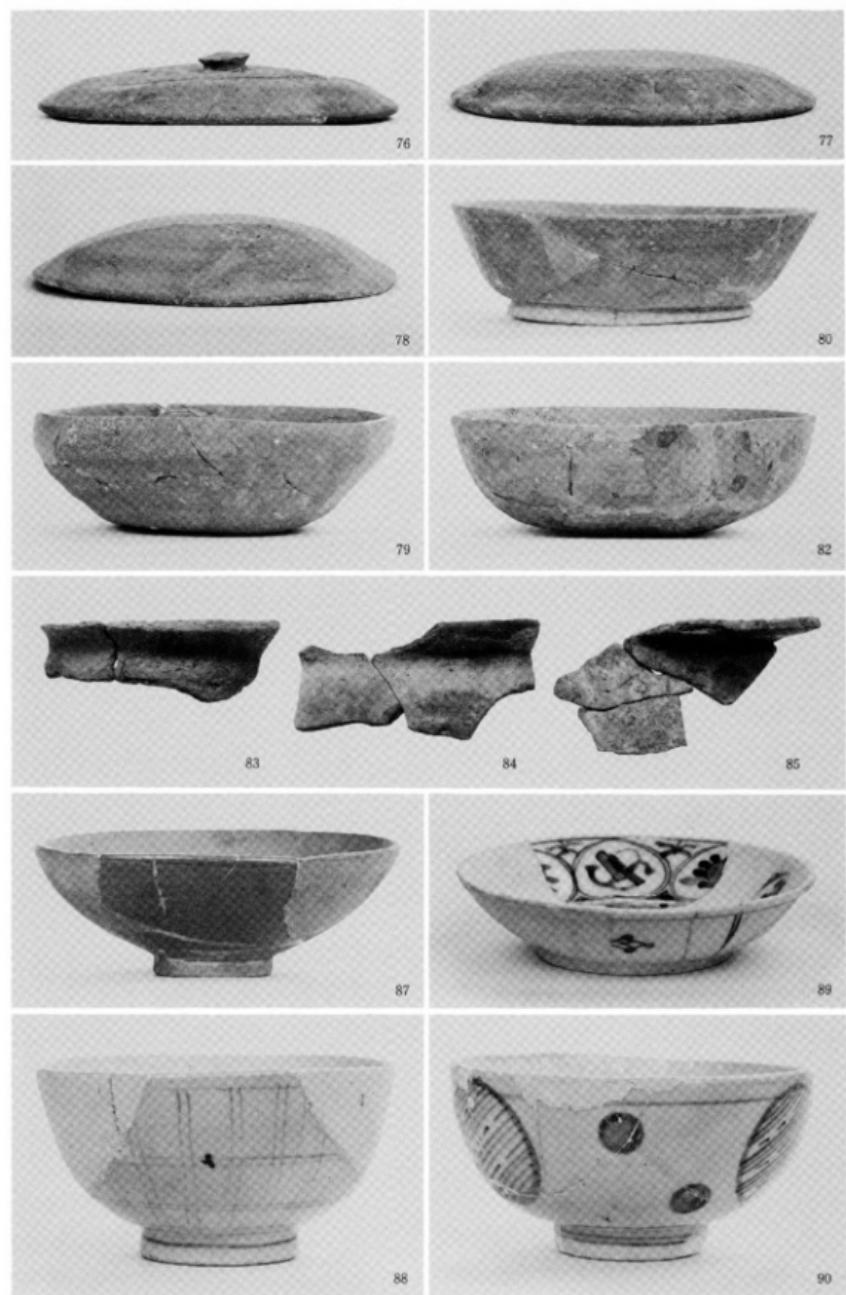
69



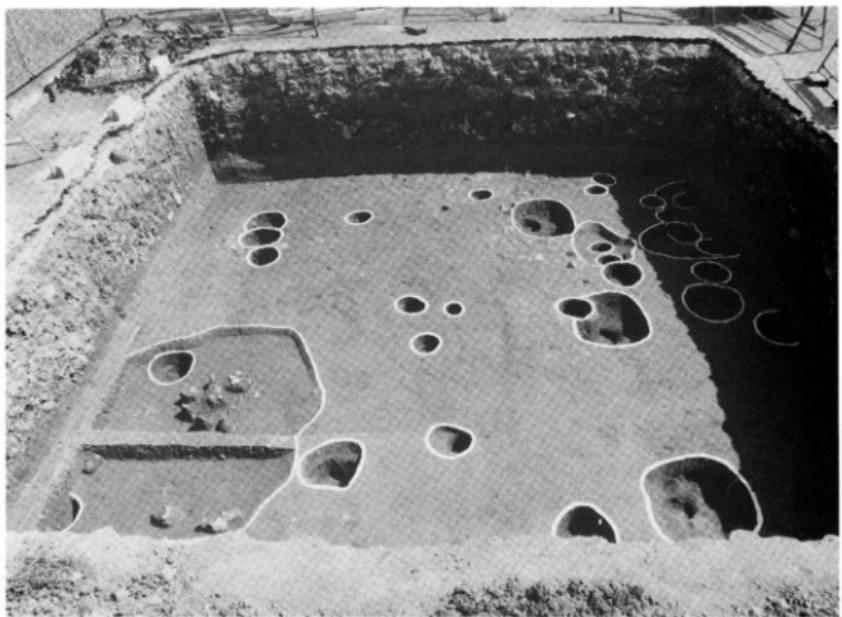
71



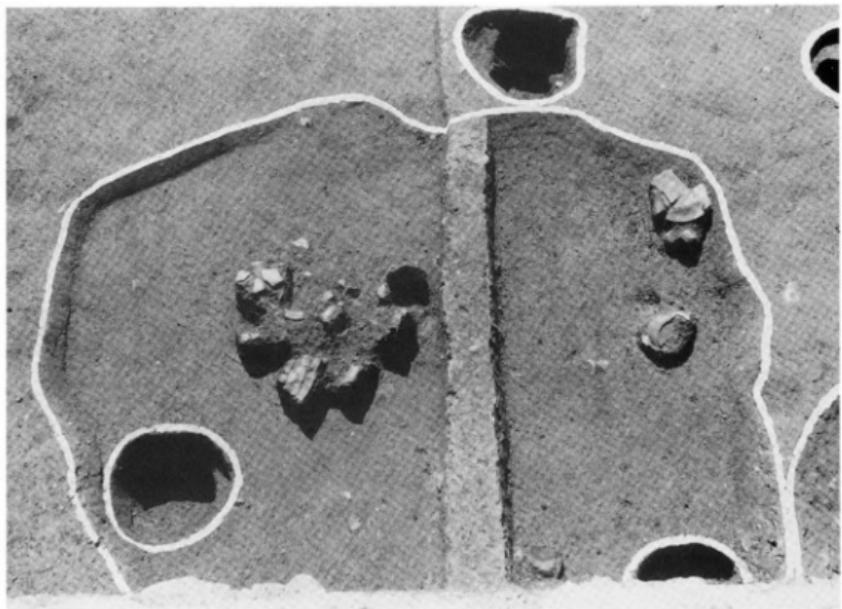
72



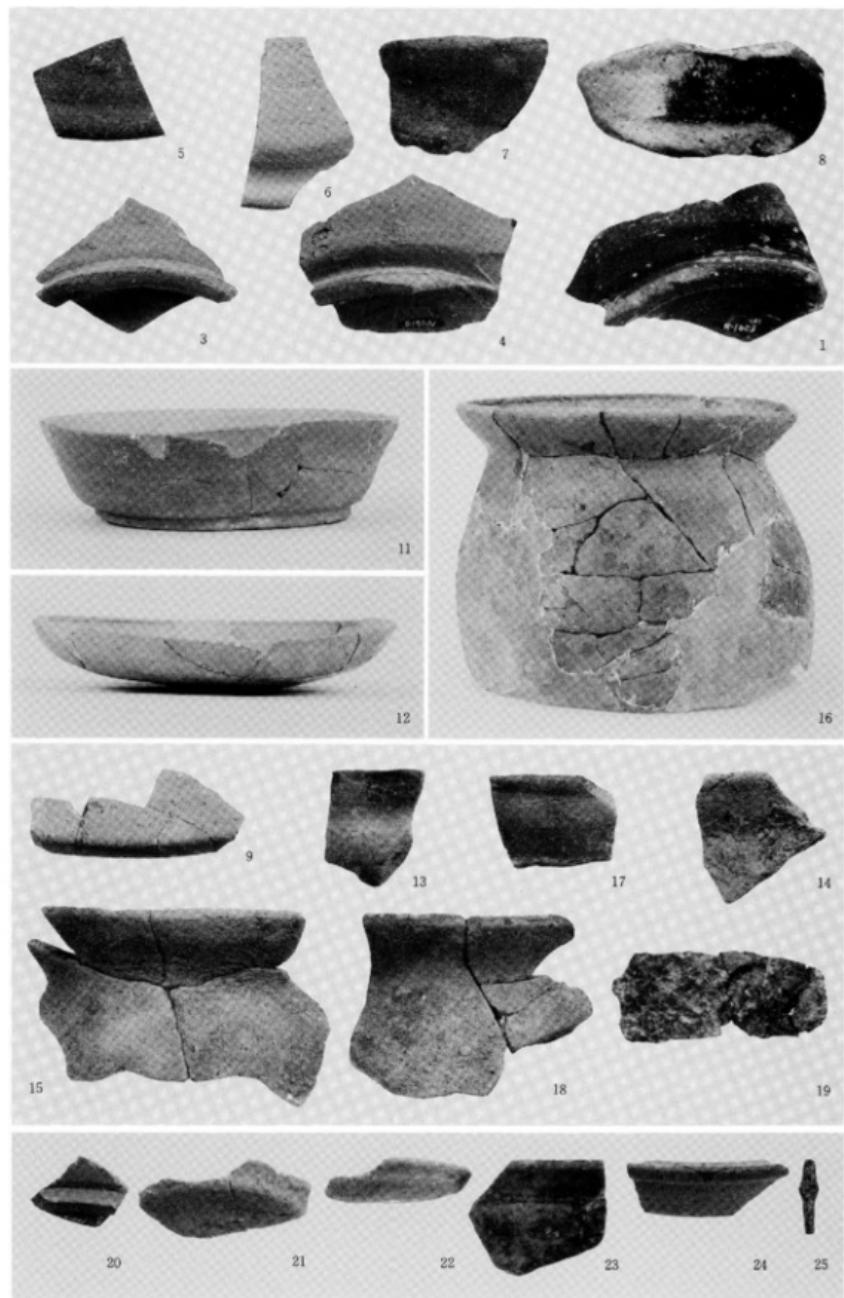
下層包含層 (76~80・82~85)、上層包含層 (87~90)



遺跡全景（北から）



SK-1 遺物出土状況



SB-1 (1・3~8)、SK-1 (9・11~19)、P-1 (20)、SB-2 (21~23)、下層包含層 (24・25)



J N M 89 遺跡全景 (西から)



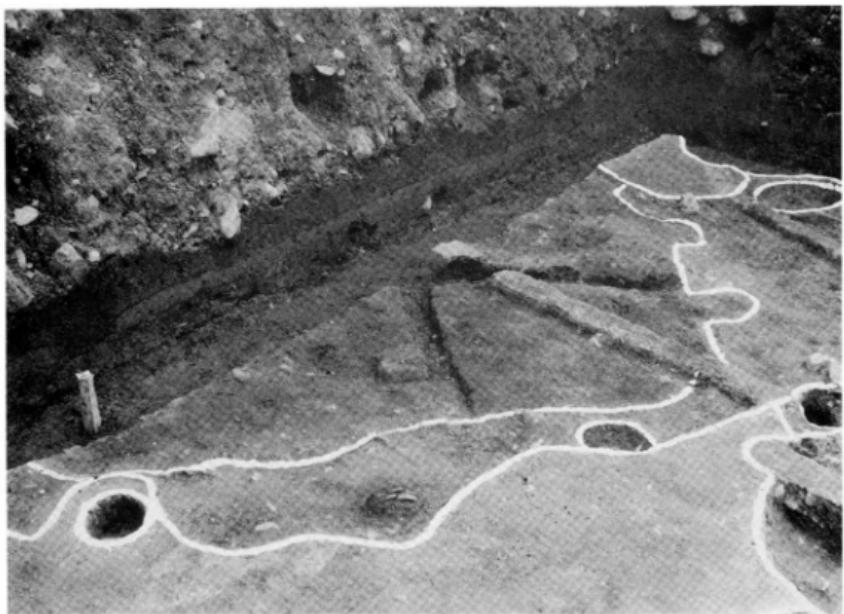
第1調査区全景 (南から)



第2調査区（北から）



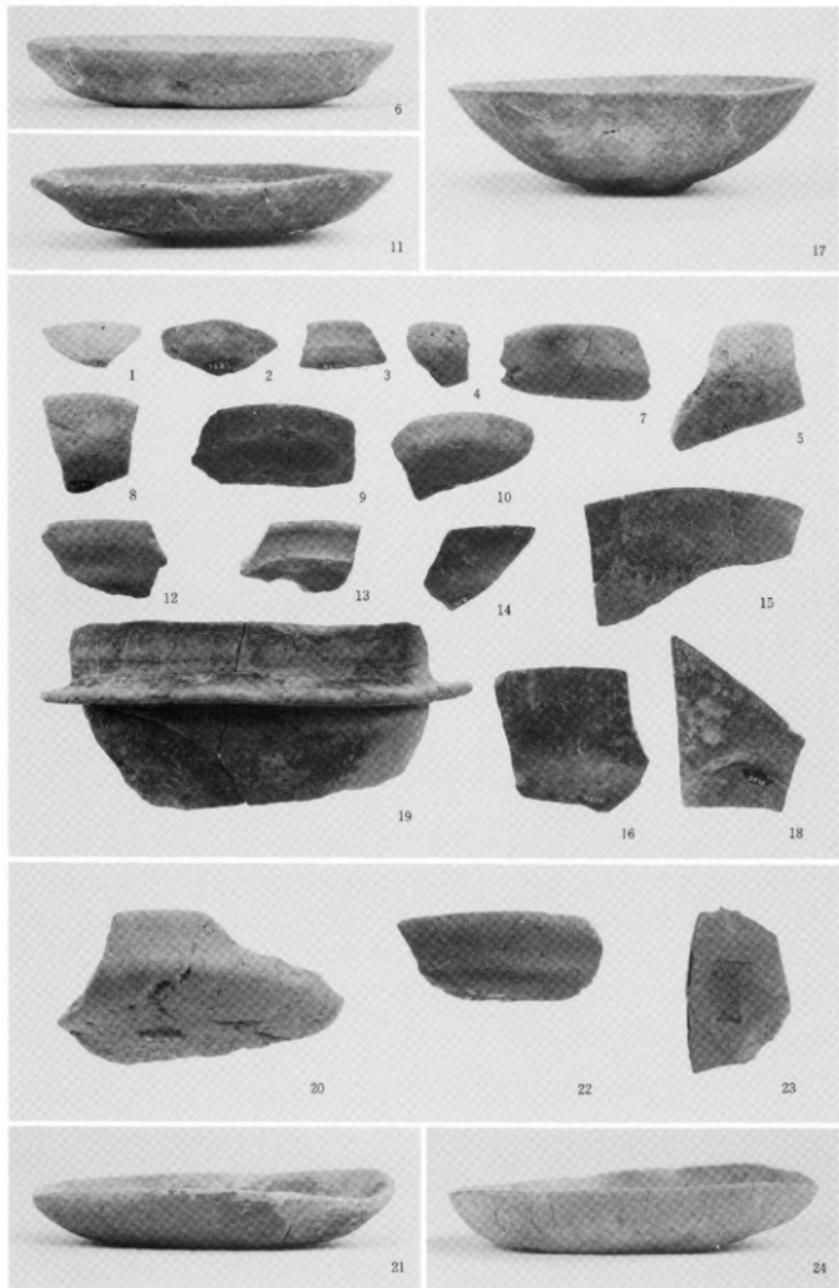
第3調査区全景（南西から）



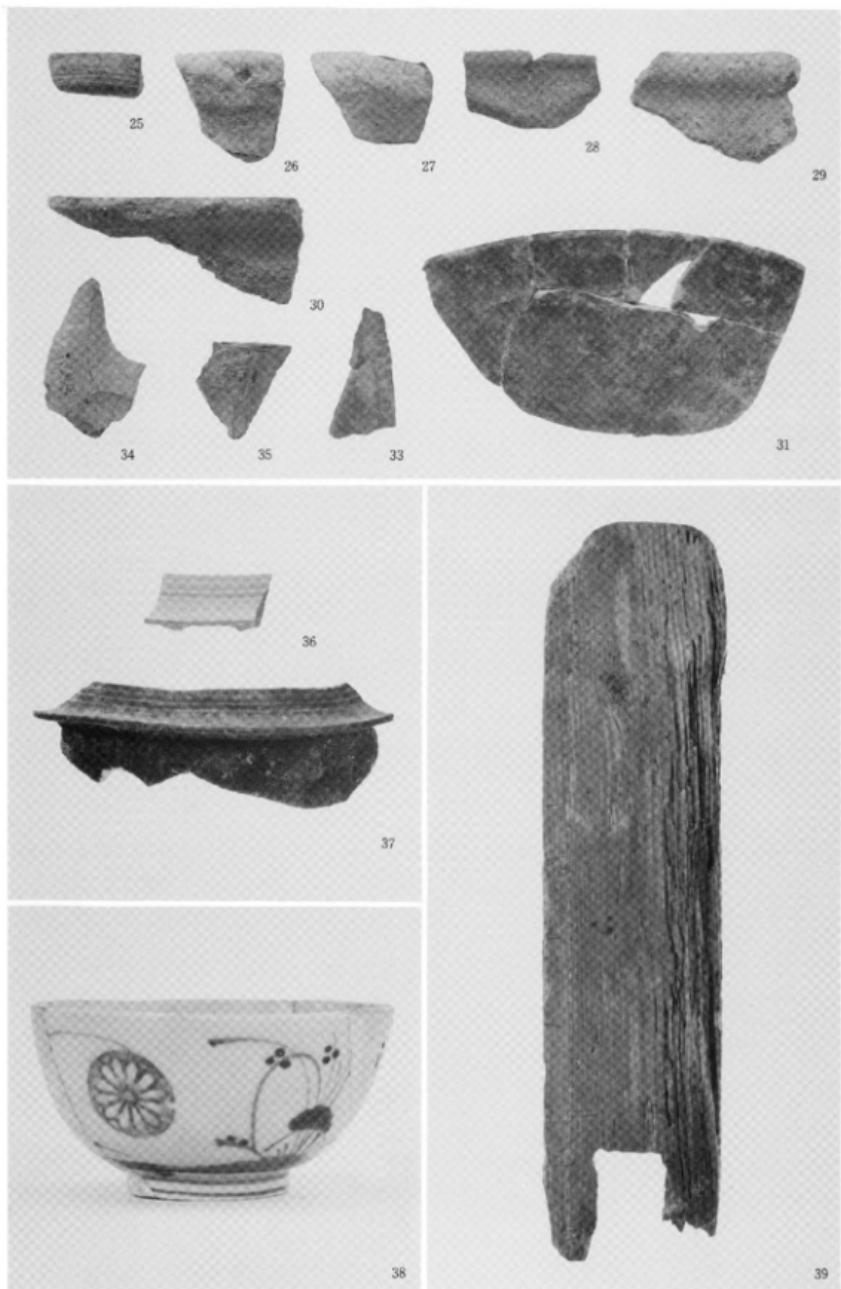
J N M 89 SK-2



J N M 90 遺跡全景 (北から)



第1調査区 (1~19)、第2調査区 (20~23)、第3調査区 (24)



J N M89 第3調査区 (25~34)、J N M90 (36~39)

河内長野市遺跡調査会報Ⅲ

1992年3月

発行 河内長野市遺跡調査会

河内長野市原町396-3

印刷 (株) 中島弘文堂印刷所

